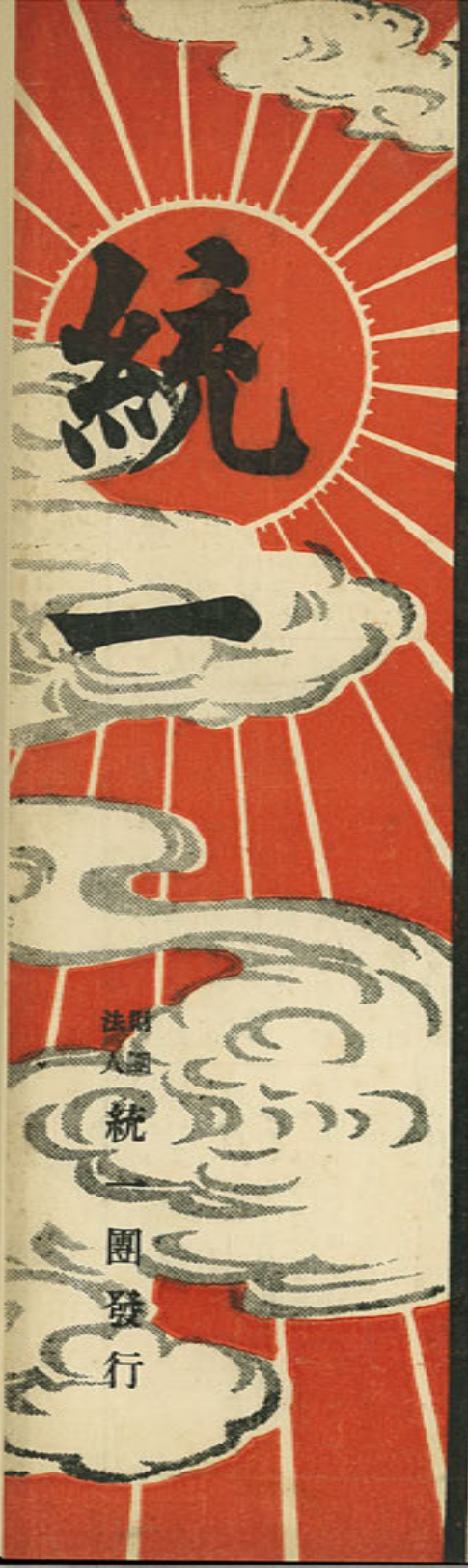

目次

法華經の經旨……故本多日生
法華經講話（三十二講）……小林一郎
合掌瞻仰の態度……笹木欣爾
國民教育革正論……平山三藏
記事
○本部團報地方教報　○寄附金維持及團費誌料領收

第四十一年八月號

財團法人 統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢献セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト敎トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ終來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一 佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事　**第二** 我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　**第三** 此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　**第四** 時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　**第五** 小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツヽ嚴然トシテ統一ノ學風ト敎化トヲ守持スル事是レナリ

敎旨ノ正明　研學ノ潤達　活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル敎學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼贊ハ最モ根本的ノ大菩事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

◎**目的**　本團ハ日蓮敎學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布敎並ニ敎化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

◎**維持員**　本團ノ事業ヲ贊賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラルヽ方ヲ維持員トス

◎**贊助員**　一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラルヽ方ヲ贊助員トス

◎**正團員**　一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラルヽ方ヲ正團員トス

◎**入團**　御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎**誌友**　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

法華經の經旨

故 本多日生

今日は『法華經の經旨』と題して、法華經の意味合はどういふ所にあるかといふことをお話しようと思ふ。たゞ法華經が有難いと申しても、その經旨が明にならなければ、どういふことを有難がつて居るのかわからぬことになる。たゞお經が有難いといつて、錦の袋に入れて、『これは非常に大切なものだ』といふやうなやり方であつたならば、それは庶物崇拜といふことに過ぎないので、或は鏡を大事にしたり、劍を大事にしたり、その他香爐であるとか、茶入であるとかいふやうなものを、お家の重寶などと言つて大切にするやうな譯で、たゞの品物になつてしまふ。たゞ非常に結構なお經であるといふだけであつて、その内容といふものが、人々の心にこなれて咀嚼されない、さういふ信仰は宗敎としてはあまり價値が無いのである。たゞ品物を大事にして居る譯で、心の方には何のことか少しもわかつて居ない從來舊い信仰にはさういふ意味の法華經崇拜もあるけれども、最早や日蓮聖人が出られる頃の法華經の解釋はさういふものではなかつた。御遺文の中にハッキリと、錦の袋に入れて頸に懸けて有難がつて居

るといふやうなことはつまらぬ事ぢやと言つて、嘲つて居られる所があるのである。であるからどうしても法華經の意味合を能く心得て信仰を續けて行かなければならぬ。その意味合を簡單なる『妙法蓮華經』の五字に纏めて、さういふ信念を續けて行くしるしにこれを口に唱へ、或は文字を拜して禮拜をするといふことになるのである。たゞその内容を少しも心得ないで、字を拜み言葉を大切にするといふだけの宗教は、今後はどうしても改革されなければならぬ時機に達して居る。時代の要求の方から言つても、その點はどうしても力强く覺醒を促さなければならぬが、宗教の根本觀念から言ふても、さういふ形式化した宗教は改善しなければならぬ。釋尊の教を立てられた大精神に顧み、時代の要求するところの眞理に鑑み、宗教の實効を現して來る意味合に鑑みたる時、どうしても舊い型の傳統的なさういふ觀念は打破らなければならぬことになると思はれるのである。

それは何にも信心をしない者よりは、さういふ形式の信仰でもある方が良いといふことも言ひ得られるけれども、併しそれは間に合せなものであつて、非常に力の無いことである。いよ〳〵事が起れば動轉して何にも力にならない。通常の場合は普通人間の力で凌いで行けば宜いのである。人間の力の及ばぬやうな重大な事の起る時、宗教信念の閃きに依つて、その光、その力に依つて救はれなければならぬのである。所が今までの有難さは、人間の力で凌ぎ切れる事を宗教の方へ持込んで、いよ〳〵大事な宗教の力に依らなければならぬ時には、狼狽てしまつて何の役にも立たぬ事をやつて居るのである。『信心して居つたら商賣がはやる、だらう』とか、『信心して居つたら何か具合の良い事があるだらう』といふやうなことをあてにして居る。さうして一生懸命に商賣をやつて居れば店も繁昌する、それを以て『これは信心のお蔭でございます』といふやうなことを言つて居るのだから、人間の力と信仰との關係を正當に理解して居ないのである。それが一たび商賣がはやらないやうになつてしまつたならば、『これはどうもならぬ、信心しても的にならぬ』と言つて狼狽へる。本當はそこからが宗教の力に依らなければならぬので、今までは宗教の問題の外に居つた、信心の眞似事みたやうな事をして居つたのである。先づ今日一般に信仰と言はれて居るものは多く眞似事であつて、本當の宗教の信心に入つて居る者は少いと考へるのである。佛教中の最も勝れた法華經であり、その法華經の精神を活躍せしめた日蓮聖人の後を繼いで正しい信仰を勵まうとする吾々の間には、モツと立入つた本格の信念を鍛上げて置かなければならぬと思ふ。

そこで法華經を有難がるといふ考には、法華經の意味合を能く心得るといふことが前提である。昔は心得るといふことを難行などと言つて、義理も知らず、味ひも知らず、何にも知らなくとも、たゞ唱へたら宜いといふやうな行き方もあつたけれども、それは大に警戒しなければならぬ行き方である。法華經の意味合を心得ずに、たゞ上すべりに、言葉を大切に思つたり、經卷を錦の袋に入れて有難がるといふ式は、所謂婆羅門式であつて、時代に不適當な亡びた宗教であると明瞭に斷定する方が宜からうと思

ふのである。

さういふ意味に於て、今日は法華經の有難い意味合といふものを、わかり易くお話して見ようと思ふ。前回には『受持の妙行』と題して、信心をする心得の方からお話をした。今日は教の方からお話をするのであるが、最初に先づ受持の妙行として申したことを簡單に述べて置きたいと思ふ。

法華經を修行するには五種の行と申して、受持、讀、誦、解說、書寫といふ五つの行があるが、その中でも最初の受持といふ一つが一番大事なことである。これが本當でなかつたならば、お經を讀むのも話をするのも何にもならないといふことに古來きまつて居る。さうしてその受持の受け方が大事なのである。受けるといふことは、法華經の意味合はどういふ風に有難いかといふ信仰の心得を教はることを言ふ。その間違はない意味合を忘れぬやうに、生涯自分が佛に成つてしまふまでは、この尊い法華經の教の意味合を教はつた心得は、これを忘れたり、ぐらついたりするやうな事の無いやうに、命に懸けてこの一番尊い心懸けを守つて行きますといふ所に、廣大無邊の功德を生じて、此の世も後の世も救はれるといふことになるのである。その釋迦如來出世本懷の法華經、釋迦の言はんとし、教へんとした大事の事柄を教はつて、命よりも大切にその意味合を守る所に廣大無邊の功德があり、それが法華經の修行の根本であるといふことになる。

法華經の教を正直に聽かずに、たとフラ〳〵聽いて居つて、さうして變な所に力を入れて見たところが、それは無駄な力の入れ方である。その教に隨ふところの心を信仰といふのである。信は隨順といつて、隨も順もしたがふといふ字である。教はつた通りに疑ひの心を除き、樣々な自分勝手の考を切棄てて、佛の仰せの通りを白紙に新しく寫し取つた如くに、鮮明に純潔に我が心に入れるのである。これを信仰といふのである。そこへ不斷日頃のつまらぬ考を持つて來て、『さうは思ふけれども、これはどういふものでせう』などと言つて跳返すやうな、さういふ氣分が最も誡むべき事柄となるのである。

そこに婦人の非常な長所がある。男子は兎角自分の考に慢心するものであるから、『いや法華經にさう書いてあつても俺は斯う思ふ』といふやうなことを直に言ひ出す。『この間あの坊主がこんな事を言つたけれども、彼奴の學問もたかが知れて居る、一つ俺は俺で法華經を見て考へ直して見ようか』といふやうなことの爲に手間暇を取つて、まご〳〵する中に一生終つてしまふのである。婦人の人はその點を從順に教の精神を受け入れやうとする。所謂柔和質直の心、羊の如き心があるといふので、そこに婦人が宗教に救はれ易いといふ特長がある。その代りに婦人の缺陷は、つまらない價値の無い教でも、その方に引き入れられてスラリと受けてしまふから、天理教でも、大本教でも、狸でも狐でも、たゞ無暗に有難がるといふやうになるから、そこで因緣が非常に大事になつて來る。正法の教を聽くべき善知識の緣を取るのと、これに反して惡知識或は邪教の方に緣があるのとでは、非常な違ひになる。つまり婦人は夫を大事にしなければならぬから、たとひ泥棒を夫にしても、酔拂ひを夫にしても、一旦自分の夫

と定めた以上は、大事に仕へて行かなければならぬやうなもので、その夫が非常な立派な人格者であれば、生涯の幸福があるのである。その如くに教の最も善きものを正しい意味に於て教はつたといふことは、生涯理想の夫を持つたやうな有難味がそこに現れて來ることになる譯である。

であるから法華經の教の意味合を素直に受纖いで行くのが受持の妙行といふことである。たゞ口に題目を唱へ、譯もわからずに有難がる、或は法華經の精神に背いた意味に於て有難がつて居るといふことは、信ずるに似て信せざるものなりと日蓮聖人は仰しやる。形は法華經を信じて居るやうだけれども實際の意味は信じて居ない。それは信といふ字をしたがふといふ字に考へたら直ぐわかる。『法華經にしたがひます』と言ひながら、教へられて居ることに反對の考を有つて居れば、それはしたがふといふことにならないのである。お釋迦樣が大切だと法華經に說いてあるのを忘れて、帝釋樣が大事だと考へて居る。親が大事だと書いてある孝經を以て親の頭を叩いて、カフェーの女と駈落をするといふことになれば、何にもならない。それでも俺は孝經を奉じて居ると言つて、何時も孝經の書物を懷ろに入れてカフェーで麥酒を飲んで居る時も孝經を持つて居る。駈落をして行くステーションにも孝經を持つて居る。これは一番大事だと言つて居る。けれどもその中に書いてあることは何が書いてあるか、女と駈落などをして、親に心配を掛けてはいかぬといふことが書いてあるのに、親父が迎へに來ればその孝經で頭を叩くといふことになつたならば、それは孝經を守る者、したがふ者とは言へないではないか。これ

は世間の事に就て考へれば直ぐわかる事だけれども、法華經を持つて逃げ歩く張は、ちやうど孝經を懷ろにして駈落をして、迎へに來た親父の頭をその本で叩くやうなことを澤山やつて居るのである。既に日蓮聖人がさういふ事を御遺文の中に書かれて居る。今日はそれが一層激しくなつて、日蓮聖人の流を汲む者が又同じやうに、法華經を讀みながらその精神に背くやうなことを言つて居る。お自我偈を讀んで御覽なさい、何が書いてあるか、最初から終ひまで久遠實成の本佛釋尊の大慈大悲が說かれて居る、その他の事は一つも無いではないか。然るに口に題目を唱へる者を集めて試みに聽いて御覽なさい。東京なら東京で百人の法華信者を集めて、『お前はどないに思つて題目を唱へて居るか』と尋ねたならば、『お釋迦樣が有難いと思つて唱へて居ります』と言ふ者は恐らく東京には一人も無いかも知れぬ。『私は柴又の帝釋樣……』『私は堀の內のお祖師樣……』『私はそんな事は考へない、何でも構はない、一貫三百……』といふやうな者が澤山出て來る。『私はお自我偈を讀んで題目を唱へる以上、壽量品の精神に背いてはならぬと考へて居ります』と、當然の事を當然に答へる者が、百人の中に一人も發見し得られないやうな狀態になつて居るのである。これ程わかり切つた事をいくら吾々が力說しても眼が醒めないといふに至つて、人間は馬鹿が多いものだといふことが洵に能くわかる。その位なら法華經を信するなどと言はなければ宜い。信ずるとはしたがふことで、法華經はいつたいどう教へられて居るか、お釋迦樣はどういふ意味合にお說きになつて居るのかと、素直に心をそこに向けて行かなければならぬ。

そのスラリと間違はぬやうに受けるのを『受持の妙行』と申すのである。我が顕本法華宗の開祖日什上人は、この點が明かにならなければ他の事は駄目だ、俺の方に口傳が傳つて居るとか、俺が偉いとかいふやうな事ばかり言つても、一般信者に對して信仰の心得を法華經の精神の通り教へて、その活々したる個人々々の改められた、淨められた、正しき信念の上に法華經を打立てるといふことを忘れたならば、最早や法華經もなく日蓮聖人の御苦勞も水の泡ぢやと日什上人は仰しやつたのである。

そこであなた方が信心をするといふに就ても、横道の所に力を入れる必要はない、自分の心懸け、有難く思つて居る意味合が、法華經の教の通りに向いて居るかどうかといふことが、最も大事な點である。それには法華經を能く心得た人から常に話を聽かなければならぬ。『何でもあの坊さんは大變有難いさうだ、この間もこの寒いのに百日も水を浴びて來たさうだ』といふやうなことを言つて有難がるが、水は誰でも浴びられる。併し心得といふものはたゞ水を浴びたからといつて得られるものではない、日蓮聖人は『法門に依て邪正をたゞすべし』と仰せられた。法門といふ言葉は佛教の術語であるが、今日の言葉にして言へば教の意味合といふことである、教の意味合を本當に心得た人に依つて、教の善し惡しといふものを聽かなければならぬ。即ちそのお經の經旨といふものを明にして、そこに熱心を籠めて情操感激といふものが起らなければならぬ。その心得る時分にはやはり落着いてスラリと考へなければいかぬ。最初から熱ばかり有つて『私は熱心でございます、本當に熱心にやります』と言つて夢中になる

といふことでは駄目である。先づ落着いて聽いて、そこに情操感激が加はつて行かなければいかぬ。ちやうど字を習ふやうなもので、最初は落着いてゆつくり書いて居る。それがだん〳〵上手になつて、今度手紙でも書く時分には、勢ひを附けてスラ〳〵と書ける。それを最初から少しも習はないで、勢ひばかり出さうとしてバッ〳〵とやるから、字の形が出來て來ない。隨分さういふ事が世間にはある。『字といふものは勢ひがなければいかぬ、手本など見て居つては碌な字は書けない』と言つて、碌に習はない中から自己流で書きなぐるから本當の字は書けない。永い間落着いて十分筆法を習つて、自然に熟達して今度勢ひを生じて來ると本當の字が書ける。信仰も同じやうなもので、最初は具合好く教を落着いて聽いて、それに熱心が加はつて來た時に本當のものが出來ることになる。

それ故に受持の妙行といふ方から申しても、教の意味合を教はるといふことが一番大事である。法華經を弘める方から申しても、教の意味合をわかるやうに話して行くといふことが一番大事なのである。

そこで然らば法華經の經旨はどういふことになつて居るかといふと、法華經は完全なる教であるから、少くとも眞理の側といふか、智慧の側からの教と、それから道德上の教として、人間の意志と言つて、善い事をしようとする强い力の教といふものがある。モウ一つは有難いと思ふところの宗教的の情操感激の教といふものがあるのである。明かな智慧を以て、成程法華經の教は確實なる眞理に契つたものだといふことを、理智が承認するところの鞏固な基礎を有つて居る。そこに吾々の爲さんとするところの

人間の意慾と言つて、爲し遂げようとする事がある。それは必ず善である。人間はうつかりした時には惡い事にも力を入れるけれども、それは間違ひで、人間の本格の意志の欲求、爲し遂げようといふことは必ず善い事である、その善い事を仕遂げる力を與へるものが法華經である。モウ一つは吾々が宗教的に慰められ安んぜられ、あゝ有難いことだといふ滿足に打たれて何とも言へぬ良い心持になり、何時もいき〳〵したる感激が動いて居る。それが一方の智慧をも一層明かにし、意志をも一層強くして行くといふやうに、この三つが互に相倚り相扶けて行くのである。人間の信仰は單なる信仰ではない、土臺には眞理の基礎があり、その上には意志の欲求があつて、基礎も堅固であり、建設も立派である、その中に於ての活動も思ふやうに行くといふことでなければならぬ。法華經の教は少くともさういふ考を以て見なければならぬのである。（次續）

法華經講話（第三十二講）

小林一郎

妙法蓮華經譬喩品第三（其四）

この譬喩品に就て、お釈迦様が舍利弗に授記をされて、お前は後の世に華光如來といふ佛に成るであらう、その華光如來の國には澤山の菩薩があると言つて、その菩薩の德の高いことをいろ〳〵な方面から説き表はされて居るのですが、まだ其の説明が續きます。

此の諸の菩薩は初めて意を發せるに非ず　皆久しく德本を植ゑ　無量百千萬億の佛の所に於て淨く梵行を修し　恒に諸佛に稱歎せらるゝことを爲　常に佛慧を修し　大神通を具し　善く一切諸法の門を知り　質直無僞にして志念堅固なり　是の如き菩薩其の國に充滿せん

（此諸菩薩　非二初發レ意一　皆久植二德本一　於二無量百千萬億佛所一　淨修二梵行一　恒爲二諸佛之所一稱歎一　常修二佛慧一　具二大神通一　善知二一切諸法之門一　質直無僞　志念堅固　如レ是菩薩充二滿其國一）

その德の高い菩薩といふものは、その時初めて教を受けたのではないといふのであります。斯ういふ事は前にも説かれてありましたが、吾々の生命は遠い過去の世から續いたものであつて、過去の報が後にまで及ぶわけです。いつでも人間が一つの行ひをすると其の報が來る。私なら私が今此處で善い事をすれば善い報が來る。惡い事をすれば惡い報が來る。

常に業に依つて報が生ずる。その報に正法と依報があるといふことは前にも申しました。正報とはその人の身と心の働きのことで、例へば今の私がドンな人間だといふことは、私が昔から今此處に居るまでにやつて來た業が本になつて、今の私といふものが出來て居るのであります。私の身、私の心は、一切の過去の業に依つて、その報を受けて今此處で皆さんにお話をして居る譯であります。それが正報であります。それから依報といふのは境遇であります。人間がドンな境遇に在るかといふことは、やはり前から積んで來た業の報として定まつて居る、斯ういふ風に考へるのであります。つまり如何なる身と如何なる心を有つて、如何なる境遇に居るかといふことが一切過去の業の報であります。

それだから境遇の罪などといふことを宜い加減に言ふものではない。この頃はよくそんな事を言ふ。『彼奴は泥棒をしたが、ナーニ彼奴が惡いのではない、境遇が惡かつたのだ』といふ。そんなことを言へば何事でも境遇の罪になつてしまふ。泥棒するやうな境遇に置いたから泥棒になつた、人殺しをするやうな境遇に置いたから人殺しをやつた。そんな事を言ふならば、善い事をするのもその通り、『金が出せるやうな境遇に居たから金を出したのだ、ナニも感心な事はない』それでは善も惡も滅茶々々になつてしまふ。すべて報といふのは、自分自身と、自分の境遇とを殘らず含んで言ふのであると考へなければなりませぬ。それだから佛の教を聽くやうな境遇に生れたといふことは、前の世から善い事をしたその報であらうといふのであります。それで佛の教を聽いたのは、今聽いたのが初めてだと思つてはいけない、前の世の善行の報として今度佛の教を聽くやうな境遇に生れたのであらう。斯ういふ思想が出て來るのであります。

それでありますから私共は、自分の身や心の働き

について一切の責任を負ふのは勿論でありますけれども、自分の境遇についても亦自分で責任を負はなければならぬことになります。それなら惡い境遇に居る者はどうしたら宜いか。そこが教といふものゝ力です。業に依つて報を作るのですが、その報を更に善きものにする爲に、吾々には教法といふものが與へられて居る。前に惡い事をしたから、惡い身と心と惡い境遇に生れたのであらうけれども、そこが佛樣のお慈悲であつて、さういふ者を善くしてやりたいといふ爲に教といふものが與へられて居るのですから、その教を學ぶことに依つて、前に惡かつたものが善くなつて行けるのであります。それが教の尊さであります。教に依らずして、どうしてこの關係を變へることが出來るものではない。だから何人にでも教に近づくやうな緣を與へてやるが宜い。教に緣のない者には、少しは無理をしても引張つて來て教を與へてやる。その教を學びさへすれば、惡い身心を有つて惡い境遇に居つた者が善い方に向けるのでありますから、教の力は實に尊いものであります。因果の關係から言へば業が因で、報が果でありますが、その果を更に今より後のための善き因とする爲に教といふものが與へられて居るのでありますから、自分の心が拗けて、身が弱くて、惡い境遇に居るからといつて決して落膽するには及ばない。又自分の周圍にそんな氣の毒な人が居つたならば、その人に教を與へて、善い方に向つてやるやうに努めれば宜い譯であります。世の中には決して失望すべき事は何もない。どんな惡な者でも教の力に依つて道の力に依つて善い方に向くのでありますから、チットも思ひ惱むべきことではないのであります。

私共でも今此世で佛の教を學ぶことが出來るのは唯この世だけの緣ではない。前からさういふ不思議な尊い緣があつて、その緣が熟して來た結果と思ふべきであります。殊に菩薩の行といふものは非常に

尊いものでありますから、菩薩の行を勵むやうになるのは、よほど深い緣だと考へなければならない。それで今ここに說かれるやうに、諸の菩薩は初めてこの時に菩提心を發したのではなく、皆久しく德本を植ゑたのだといふ。此の德本といふのにはいろいろな意味の說明がありますが、要するに佛の心を以て自分の心にするといふことが凡ての善いことの根本でなければならない。それで前から佛に仕へて、佛の心を自分の心持とするやうな修行をして居つた。さうして無量百千萬億の佛の所に於て、淨く梵行を修した。梵といふのもやはり淸淨といふ意味でありますが、此の梵行といふことは、極く低い意味に使はれて居るところもあるやうです。たゞ煩惱を除くといふだけの意味に使はれて居るところもあります。しかしながら菩薩の場合に申しますと、それよりモウ少し深い意味になつて、人に救ひを與へながらその報を求めないのを梵行といふ。こゝはその意味に取つた方が宜しい。人に對して善い事をして直ちに其の報を求めるといふ、心持の者ばかりでもないでせうけれども、報があれば誰でも幾らか氣持が好いに相違ない。しかしながら本當に慈悲の心持が充滿して來れば、報などゝいふことをチンで眼中に置かない。人に善い事をすることがそれが自身の悅びである譯です。さういふやうな行ひを菩薩の場合には梵行といひます。

さういふ梵行を修して、佛樣に褒められるやうな德を積んだ菩薩である。さうして又常に佛の智慧を具へる爲の修行をして、大神通を具するやうになつた。此の神通力のことは前にもいろ〳〵說かれてありましたが、その神通力をお釋迦樣がお弟子達に說明される場合に、煩惱を除く働きが一番大きい神通力だと言つて居られる。天眼通とか天耳通とかいろいろの神通力があるけれども、それは必ずしも佛弟子でなくても、婆羅門の連中でもやれる。しかしな

がら漏盡通といつて煩惱をスッカリ根本的に除くといふその働きが最大の神通力だと敎へて居られる。こゝもさういふ意味を含んで解釋した方が宜しい。さうして善く一切諸法の門を知る、――有らゆる敎をスッカリ辨へて居る。『善く』といふのですから、いゝ加減に知つて居るのでなくして、完全に一切の人に敎ふべき敎をスッカリ辨へて居る。質直無僞――心が眞直で飾りがなく、志念が堅固である。佛に成るまでは修行を止めまいといふ大決心を持つて居る。斯ういふ菩薩がその華光如來の國に充滿するであらう。

舍利弗　華光佛は壽十二小劫ならん　王子と爲りて未だ作佛せざる時をば除く　其の國の人民は壽八小劫ならん　華光如來十二小劫を過ぎて堅滿菩薩に阿耨多羅三藐三菩提の記を授け　諸の比丘に告げん　是の堅滿菩薩次に當に作佛すべし　號をば華足安行　多陀阿伽度　阿羅訶三藐三佛陀と曰はん　其の佛の國土も亦復た是の如くならんと

（舍利弗　華光佛壽十二小劫　除ㇾ爲ニ王子一未ニ作佛一　時ニ　其國人民　壽八小劫　華光如來　過ニ十二小劫一　授ニ堅滿菩薩　阿耨多羅三藐三菩提記一　告ニ諸比丘一　是堅滿菩薩　次當ニ作佛一　號曰ニ華足安行　多陀阿伽度阿羅訶　三藐三佛陀一　其佛國土　亦復如ㇾ是）

舍利弗よ、お前が華光佛になつた時に、その華光佛の壽命は十二小劫といふ長い間であらう。尤も前に王子となつてまだ佛に成らない時のことは別である。これは誰でも知つて居るやうに、お釋迦樣が國王の子であつて出家をされたといふので、佛に成る人の中には國王の家に生れる者が非常に多いと考へられて居る。世の中に一番勝れた人とはドンナ人だらうと考へて見ると、苦勞して世の中の酸いも辛いもスッカリ知り分けた人が最も勝れた人だとも言へる。しかしながら又あまり苦勞をすれば人の心がヒ

ネくれるとも考へられる。人間は順境に居るのが宜いか、或は逆境に居るのが宜いかといふことは難しい問題であつて、逆境に居る方が修養は勿論出來るけれども、しかし逆境に居れば幾らかヒネくれるといふことが考へられる。それであるから順境に在つて心の驕らないのが最上に達ひない。普通の人間は金があるとか、身分が高いとかなれば心が驕るからいかぬけれども、順境に居つて心の驕らない程度の人なら申分のない人である。それで國王の家に生れて心が驕らないで、非常に優しい心持を有つた人が佛に成るといふ思想が生れて來る。私は自分で痛切に感じて居るのですが、私は學生時分から隨分逆境に居ていろ〳〵な酷い目に遭つて來て居るので、ドウモ心がひねくれていけない。人のアラを見たくなつて仕樣がない。自分が苦んで通つて來た人間といふものは兎角ひねくれる。それで學生などに始終言ふ、『君達苦んだら、その苦みは修行になつて宜いけれども、ひねくれないやうにしなければいかぬ。僕自身がどうもいろ〳〵苦んで、ひねくれて居て困るから……』と言ふのですが、ドウモ是は難しいことです。本當に言へば、順境であつて心が少しも驕らないといふのが最上のものに相違ない。それはなか〳〵出來難い事でせうけれども、出來ればそれが最上のものに相違ない。それで國王の家に生れて、而も菩提心を發し、佛に成る修行をするといふ事が非常に尊い事と思はれて居るのであります。お釈迦樣がさうでありますから、そこで舍利弗に對して、お前が佛に成る場合もさういふ經過を通つて來るだらうと言はれるのであります。

その國の人民の壽命は八小劫であらう。それから華光如來は十二小劫といふ年月を過ぎてから、堅滿菩薩といふ人に阿耨多羅三藐三菩提の記を授ける、即ち佛に成ることの許しを與へる。さうしてその場合に諸の比丘に告げて言ふには、『この堅滿菩薩は

自分の次に必ず佛に成る、その時には華足安行といふ名の佛に成るだらう』と斯う言ふであらう。これはつまり佛が菩薩を教へて、その菩薩が佛に成つてそれが又菩薩を教へて、それが又佛に成るといふ風にして、ズット佛の教といふものが朽ちないで、滅びないで永く遺つて行くといふ思想であります。

そこで華足安行、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀とありますが、華足安行とは德が充分にあつて、立派な行ひが出來るといふ意味。多陀阿伽度は『如來』といふ意味です。阿羅訶は『應供』、三藐三佛陀は『正徧知』といふことです。佛の十號といふことを前に申しましたが、その十號の中に於て、この三つが主なものでありますから、こゝでは三つを擧げて餘の七つを略してある。佛としての特色がハッキリ誰の眼にも映るのはこの三つの事柄で、その外には無上士であるとか、調御丈夫とかいふやうな言葉がありますけれども、それは要するにこの三つの德の應用的とでも申しませうか、實際に現れた方面に過ぎない。そこで華足安行といふ佛に成るだらうと言つて、この三つの稱號を擧げました。その佛の國土も亦復是の如くならんといふのは、前の華光如來の國土と同じやうであるであらうといふのです。

舍利弗　是の華光佛の滅度の後　正法世に住すること三十二小劫　像法世に住すること亦三十二小劫ならんと

（舍利弗　是華光佛　滅度之後　正法住レ世　三十二小劫　像法住レ世　亦三十二小劫）

正法、像法とありますが、これは正法、像法、末法といふ言葉で誰もよく知つて居るのですが、末法といふのは『法が末になつた』といふ意味ではなく末の字は打消しに使はれるので、法の無くなつた時代といふ意味です。正法は佛法が佛樣のお心の通りに行はれて居る時代、像法はそれが形だけ傳つて居る時代、末法は法が無くなつて滅びて行く時代、斯

ういふ風に言はれて居ります。それで正法世に住すること三十二小劫といふのは、佛のお心持通りに法が行はれる時代、即ち法をたゞ學ぶだけでなく、法を實行する者が絶えない時代。像法の方はその教が理論として研究されたり、或はいろ〳〵に言ひ傳へ語り傳へられるけれども、實行する者が乏しくなる時代、それから末法のことは此處に擧げてありませぬが、末法といふのは法が滅びて無くなつて行く時代です。

若しこれを短い言葉で言ふならば、正法の時は教行、證が揃つて居る時代で、像法の時は教ばかりが世の中に存して居る時代、斯う言つて宜い譯です。教と行と證と揃へばまことに宜い。教を學ぶといふことは第一必要なことでありますが、教を學んでも唯だ學んだだけでは仕方がない、それを實行しなければならぬ。それを實行して見て、初めて證が得られる證とは悟ることです。習つただけでは充分に解るものでない。一通りは解るでせうけれども、實際やつて見ないと『成程こゝだナ』といふことは解らないのですから、教を學んで、それを實行して見てそれから證が得られる。その教と行と證が揃つて居る時が正法。それから實行する者がだん〳〵無くなり、從つて悟る者もなくなつて、教だけが流布して居る時代が像法。それから末法はその教も殆んど無くなつてしまふ時代です。

その正法世に住すること三十二小劫、像法世に住すること亦三十二小劫であるだらうと言はれた。これは舍利弗が未來に佛に成ることを約束されましてその佛の教化がどういふ風に及ぶかといふことを一通り說かれた譯であります。

爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して
偈を說きて言はく
舍利弗來世に　佛普智尊と成り
號をば名けて華光と
當に無量の衆を度すべし

（爾時世尊　欲ニ重宣ニ此義ニ而設レ偈言　舍利弗來世成ニ佛普智尊一　號名曰ニ華光一　當レ度ニ無量衆一）

重ねて偈を說いて申されるには、舍利弗は來世に普智尊と成るだらうとある。普智といふのは前にいふ正徧知と同じです。普くといふ以上は、唯だ總てを知るだけではなく正しく總てを知るのでなければ普くとは言へない。だから普智尊とは正徧知を具へたもの、即ち佛といふことです。その佛と成つた時に、その名を華光と言ふのであらう。さうして數限りない大勢の人間を救ふであらうといふのです。

無數の佛を供養し　菩薩の行
十力等の功德を具足
して　無上道を證せん
無量劫を過ぎ已りて　劫をば大寶嚴と名け
世界をば離垢と名けん　淸淨にして瑕穢なく
瑠璃を以て地と爲し　金繩其の道を界ひ
常に華果寶有らん

（供ニ養無數佛一　具ニ足菩薩行　十力等功德一　證ニ於無上道一　過ニ無量劫一已　劫名ニ大寶嚴一　世界名ニ離垢一　淸淨無ニ瑕穢一　以ニ瑠璃一爲レ地　金繩界ニ其道一　七寶雜色樹　常有ニ華果實一）

さうして數限りない佛を供養し、菩薩の行を具足して、漸く佛の境界に進み、十力（前にありました佛の具へらるゝ力です）等の功德を具へて、無上道を證せん。無上道は絶對のさとり、即ち佛のさとりです。それを自分のものにするであらう。それは無量劫といふ非常に永い年月を過ぎて後のことであるが、その時代のことを大寶莊嚴と言ふであらう。これは前の本文にあつたことを繰返していはれたわけです。

七寶雜色の樹に

彼の國の諸の菩薩　志念常に堅固にして
神通波羅蜜　皆已に悉く具足し
無數の佛の所に於て　善く菩薩の道を學せん

是の如き等の大士　華光佛の所化ならん

（彼國諸菩薩　志念常堅固　神通波羅蜜　皆已悉具足
於二無數佛所一　善學二菩薩道一　如レ是等大士　華光
佛所化）

その佛の國にはいろ〳〵な菩薩が居る。その菩薩は志念常に堅固、即ち絶えず修行して、佛に成らない間は修行を止めまいといふやうな、シッカリした心持を有つて居る。神通力があり、また六波羅蜜といふ菩薩行を具足して居る。その菩薩はズット前から佛の道に緣があるのであつて、既に前の世に於て數限りない佛の所で善く菩薩の道を學んだ者である。是の如き大士、即ち菩薩が、今度華光佛といふ佛の所に來てモウ一度修行して、さうして華光佛の教化を受けるのである。此の大士といふのは前にもあるが所謂『大心之士』といふのを略して言ふので佛に成りたいといふ心を失はぬ者です。これ程大きい心持はない。佛に成りたいといふ心持は、數限りない人間を救ひたいといふ心持ですから、これ程大きい心持はない。それ故に菩薩のことを大心の士、略して大士と言ふのであります。

佛王子爲らん時　國を棄て世の榮を捨て
最末後の身に於て　出家して佛道を成ぜん

（佛爲二王子一時　棄レ國捨二世榮一　於二最末後身一　出家
成二佛道一）

その佛、即ち華光佛は佛に成らない前に王子であつた時、お釈迦様と同じやうに王子であつた時に、國を捨て世の中の榮華を捨てゝ種々の修行を積み、さうして修行を積んだ最後に於て、覺を得て、佛となるであらう。是れは前にあつた通りです。

華光佛世に住する　壽十二小劫
其の國の人民衆は　壽命八小劫ならん
佛滅度の後　正法世に住すること
三十二小劫　廣く諸の衆生を度せん
正法滅盡し已りて　像法三十二

（華光佛住レ世　壽十二小劫　其國人民衆　壽命八小劫
佛滅度之後　正法住二於世一　三十二小劫　廣度二諸
衆生一　正法滅盡已　像法三十二）

これは前の長行（偈でなく、普通の文でかいてある所を長行といひます。）にあつたことを繰返されて居るのであります。

舍利廣く流布して　天人普く供養せん
華光佛の所爲　其の事皆是の如し
其の兩足聖尊　最勝にして倫匹無けん
彼即ち是れ汝が身なり　宜しく應に自ら欣慶すべし

（舍利廣流布　天人普供養　華光佛所爲　其事皆如レ是
其兩足聖尊　最勝無二倫匹一　彼即是汝身　宜應二自
欣慶一）

此の舍利を供養するといふことは、佛教の起る前から、印度に舊くからの習慣であります。徳の高い人が死んだ場合にその骨を方々に分けて、そこで塔を建てる。此の習はしは佛教ばかりではなく、婆羅門時代から既にあつたのです。そこで舍利のある所には自然其の人の感化も永く殘るといふわけで、一つ所に置かないで、遺骨を方々に分けて置くのであります。お釈迦様の入滅になつた時も、八つの國の王が分けてその上に塔を建てたと申します。

そこで華光佛が滅度した後にもその舍利が廣く流布して、天上界の者も人間界の者も皆それを供養するであらう。『兩足聖尊』といふのはやはり佛のことで、前にもある通り福と智慧とが共に具はるから兩足といふ。その具へて居る徳の高いことは最も勝れて、誰も比べるものがないであらう。その非常な勝れた佛といふのは、即ち舍利弗よ、お前なのだ、お前が後に至つてさういふ者になるのだ。今にさういふ境界にまで行かれるのであるから、自分で大いに欣喜して、これから菩薩の行をます〳〵勵んで行つたら宜からうと言はれる。

斯う言つて舍利弗に對して、後に佛に成るべき約束即ち授記をされた譯です。此處は大體前にあつたことの繰返しですから、あまり詳しく申しませぬ。これは初めて舍利弗に對して授記といふものがある譯です。お弟子の中で是れが初めてですけれども、併しながら既に舍利弗に授記がある以上は、舍利弗でない者でも修行さへすれば、やはり佛に成れるだらうといふ見込はつく譯ですから、これを聞いて他の者が非常によろこんだ。

爾の時に四部の衆の比丘 比丘尼 優婆塞 優婆夷 天 龍 夜叉 乾闥婆 阿脩羅 迦樓羅 緊那羅 摩睺羅伽等の大衆 舍利弗の佛前に於て阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを見て心大いに歡喜し 踊躍すること無量なり 各々に身に著けたる所の上衣を脱ぎて以て佛に供養す

（爾時四部衆 比丘 比丘尼 優婆塞 優婆夷 天 龍 夜叉 乾闥婆 阿脩羅 迦樓羅 緊那羅 摩睺羅伽等大衆 見二舍利弗一 於二佛前一受二阿耨多羅三藐三菩提記一 心大歡喜 踊躍無量 各々脱二身所レ著上衣一 以供二養佛一）

四部の衆といふのは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷のことをいひます。そのほか天、龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、これは序品にあつたのを繰返して居る。序品のところで申上げたやうに生命のある者はみな佛の教を受け得るのだといふ思想であります。この中にはいろ〳〵なものが現はれて居る。例へば天上界に居るもの、空を飛んで歩くもの、海の中にある龍のやうなもの、地面の上を匍つて歩くもの、苟くも生命のあるものであればみな佛の教を學ぶことが出來る。佛の教を學ぶことが出來れば覺りを開くことが出來るといふ、非常に大きな思想であります。序品に既にそのことが現れて居りますが、こゝでモウ一遍繰返して、天上界の音樂を奏する神とか、空を飛ぶ夜叉のやうな

ものとか、海に棲む龍王とか、或は金翅鳥（迦樓羅）とかいふ翼を有つて飛んで歩くもの、いろ〳〵なものを竝べてある。即ち生命のあるものはみな佛の教に緣があるのでありますから、その佛の弟子の一人である舍利弗が將來佛に成れるといふ約束をなされた以上は、自分達でもやはり同じやうに覺が得られるといふ見込みがついたので非常に喜ぶ譯です。舍利弗が佛前に於て阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを見て心大いに歡喜して、今直ぐといふ譯にはいかぬけれども、自分達だつて結局はさういふ境界に行けるだらうといふ見込みがついた譯ですから、躍り上つて喜んだ。さうして各々自分の著て居るところの上衣を脱つて佛に供養した。供養はいつも申すやうに感謝の心持をあらはすのです。

釋提桓因 梵天王等 無數の天子と亦天の妙衣 天の曼陀羅華 摩訶曼陀羅華等を以て佛に供養す 所散の大衣 虚空の中に住して自ら回轉す 諸天の伎樂百千萬種 虚空の中に於て一時に俱に作し 衆の天華を雨して是の言を作さく 佛 昔 波羅奈に於て初めて法輪を轉じ 今乃ち復た無上最大の法輪を轉じたまふと

（釋提桓因 梵天王等 與二無數天子一 亦以二天妙衣 天曼陀羅華 摩訶曼陀羅華等一 供二養於佛一 所散 天衣 住二虚空中一 而自回轉 諸天伎樂 百千萬種 於二虚空中一 一時俱作 雨二衆天華一 而作二是言一 佛言於二波羅奈一 初轉二法輪一 今乃復轉二無上最大 法輪一）

釋提桓因は帝釋天のこと、それから梵天王、そのほか數限りないといろの天上界に住んで居る天人達も、天の妙衣とか、天の曼陀羅華とか、摩訶曼陀羅華等を以て供養した。曼陀羅華といふのは白い蓮の華のこと、摩訶とは大きいことですが、これは必しも白い蓮の華だけを言つたのではないでせう。白い蓮の華が一番美しいから、美しい華を以て佛に供養するといふ意味です。

それから又天上界のものがパッと散したところの天の衣が、虚空の中に於てグル〳〵回轉して、そこら中一パイに廻つて居る。これは前にも申したと思ひますが、佛教の起ります以前に於ては、天上界とこの地上とは非常に段の違ふものゝやうに考へて居た。天上界に於ては苦勞もなく惱みもない。この地上に於ては苦勞や惱みが多い、罪や汚れが多い。それだからこの世で善い事をすれば、その報として次の世は天上界に生れ、天上界に生れてしまへばモウ苦勞はないのだ、斯ういふ思想が多かつたのであります。しかしお釋迦樣はサウはお考へにならなかつた。

本當の悦びといふものは、苦勞がないといふことではなくて、常に何か善い事をして居ること、それが本當の悦びでなければならない。それだから人間界のものが佛の敎に依つて救はれると同じやうに、天上界のものでも佛の敎を受けなければいけない。天上界に生れてそれで呑氣にして居るべきものではないといふことを常々敎へられました。ですから人間界のものが佛に歸依すると同じやうに、天上界のものも佛に歸依する。其の人間界に於て舍利弗の授記があつたのであるから、天上界の者も非常に歡喜したわけです。

それからまた音樂を奏したり、天の美しい華をふらしたりして、佛に對する感謝の心持を表はして、さうして衆が一緒に斯う言つた。『佛昔波羅奈に於て初めて法輪を轉じ』、佛樣は昔佛陀伽耶で覺をお開きになつた後に、波羅奈にお出でになつて、その時はじめて貴い敎をお說きになつた。それ以來ズッと敎を說いて居らつしやるけれども、『今乃ち復た無上最大の法輪を轉じたまふ』。無上最大の法輪とは一切の人間を佛にする敎ですから、これ程大きいものはない。斯ういふ最上の敎をお說き下さるのだと言つて、衆が感謝したのであります。

爾の時に諸の天子　重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說きて言さく

昔波羅奈に於て　四諦の法輪を轉じ
分別して諸法　五衆の生滅を說きたまひ
今復た最妙　無上の大法輪を轉じたまふ

（爾時諸天子　欲ニ重宣ニ此義一　而說偈言　昔於ニ波羅奈一　轉ニ四諦法輪一　分別說ニ諸法　五衆之生滅一　今復轉ニ最妙　無上大法輪一）

四諦のことは前に幾度も申しましたが、四諦こそは佛敎の入口であつて、又終局でもある。佛敎といふのは要するにこの四諦なのです。一番初めにお釋迦樣がお說きになつたのが四諦である。それから最後に御入滅の時に須跋陀羅といふ百歲の老人に說かれたのもやはり四諦であつたといふことであります。ですから說き始めも四諦、說き終りも四諦で、是れは佛敎の全體を通じたものであります。四諦といふのは苦諦、集諦、滅諦、道諦ですが、つまり人生は苦である。人生は何處から考へたつて不滿足なものだといふことを徹底的に說くのが苦諦です。それから人々の心の中には善い心持、惡い心持、さまざまな心持が集つて居るものだといふことを徹底的に說くのが集諦、その苦しみや迷ひを除いた狀態を詳しく說くのが滅諦。その苦しみや迷ひを除く仕方を詳しく說かれるのが道諦であります。これは前にも申したことでありますが、その滅諦にいろ〳〵ある譯です。苦諦や集諦はどの敎も同じやうなものでは人生不滿足だといふことは誰が聞いてもわかることであるし、また吾々の心の中にさま〳〵な心が混じてあるといふことも能くわかることですけれども、滅諦といふその滅の程度はいろ〳〵ある。だから滅の考へ方に依つて深い敎にもなれば、極く淺い敎にもなる譯です。佛敎全體が四諦だといふのはその意味であつて、小乘では小乘流の滅を說くし、大乘では大乘流の滅を說く。方便の中では方便としての滅

を說き、眞實の敎は眞實としての滅を說く、滅といふものゝ考へ方は幾らもある譯です。極く簡單に言へば貪欲とか愚痴とかいふものを滅するのも一つの滅ですし、大きく言へば自分といふものと他人といふものゝ區別をスッカリ捨てしまつて、一切衆生の爲に心を用ひるといふのが本當の滅ですから、滅は幾らでもある。つまり覺の程度といふものは滅の程度だとも言へる。それですから四諦が即ち佛敎の四つの柱だといふ風に考へて、滅の度合に依つて小乘大乘、方便、眞實、さま〳〵な敎を考へて行けばよいのです。

それで一番初めに波羅奈に於て四諦を說かれた。さうして分別して諸法五衆の生滅を說かれた。諸法とは有らゆるものといふこと、吾々が有らゆる事物に接して居る間に五衆が起る。五衆は五蘊といつて色、受、想、行、識のことです。『色』は外部から與へられるさま〳〵な刺戟に應じて起る種々の感覺のこと。『受』その感覺に依つて生ずるいろ〳〵な感情。『想』はそれから出て來るいろ〳〵な思想。それから『行』といふのは、意思のはたらきです。是れから實行しようといふ、其の實行の本になる心の働きですから、意思の作用と見れば宜い。『識』は上の四つを纏める作用です。色受想行識は要するに身や心のさま〳〵なはたらきです。その五蘊の生じたり滅したりするいろ〳〵な變化の有樣をお說きになる。さうしてそれから四十年餘りだん〳〵敎を說いて居らつしやつたが、今復たこゝで最も勝れた最上の敎、即ち一切のものを佛にするといふ大事な敎をお說きになる。

是の法は甚だ深奧にして　能く信ずる者あること少なり
我等昔より來　數世尊の說を聞きたてまつるに
未だ曾て是の如き　深妙の上法を聞かず

世尊是の法を說きたまふに　我等皆隨喜す

（此法甚深奧　少レ有二能信者一　我等從レ昔來　數聞二世尊說一　未二曾聞二如レ是　深妙之上法一　世尊說二是法一　我等皆隨喜）

是の法とは今の最妙無上の大法輪を言ふので、一切衆生が皆佛に成れるといふこの敎は、非常に奧深いものであつて、能く之を信ずる者は少い。これは平凡なやうな言葉ですが、よく味つて見ると非常に意味の深い言葉で、なか〳〵佛に成れるといふことを信ずる者は實際少い。現に吾々でもなか〳〵さう信じられない。成程一應は信じて居る。お經を讀めば佛に成ると書いてあるから、成れるだらうと思ふ。しかし腹の底でどう考へて居るかといふと、『容易に成れさうもないナ』と思つて居る。又實際難かしい事です。だから信ずる者は少い。まアいゝ加減に信ずるなら誰でも信ずる、佛に成れると書いてあるから成れるのだと言つてしまへばそれまでの話ですけれども、本當に自分が佛に成れると信ずる者がどれだけあるかといへば、チョット心細い譯です。だから能く信ずる者は少いといつてある。

我等は昔よりたび〳〵佛樣の仰しやることを伺つたけれども、未だ曾て斯ういふ深妙の上法、誰でも佛の境界に到達し得られるといふ、こんな勝れた法を聞いたことはない。それを今お說き下さるのだから、これはドウも有難くて堪らないといふのです。

大智舍利弗　今得レ受二尊記一　我等亦如レ是　必當レ得下作佛　於二一切世間一　最尊無上有レ上）

我等亦是の如く　今尊記を受くることを得たり
一切世間に於て　必ず當に作佛して
最尊にして上有ること　無きことを得べし

（大智舍利弗　今得レ受二尊記一　我等亦如レ是　必當レ得下作佛　於二一切世間一　最尊無上有レ上）

大智舍利弗が今授記を受けた。これは言ひ方が面

白い。前には能く信ずる者少しとあつて、こゝには大智舍利弗とある。信といふことゝ智といふことは結局は同じでなければならない。本當に信ずるといふことは本當に知るといふことである。本當の智慧を有つて居る者は本當の信を有つて居る者である。最上の所に行けば兩者は全く一致する。それを言ひ分けたところが面白い。信ずる者はないぞと言つて置いて、舍利弗のことを言ふ時には大智といふ。舍利弗のやうな偉い智慧を具へた者であるから、佛に成れるといふことも信じたに相違ない。その信ずる力があるから、尊記といつて、『お前は今に佛に成るだらう』といふ御許しを得た。實にこれは有難い事である。さういふ實例が今眼の前に出て來たのだからして、我等も亦是の如く必ず當に作佛することが出來るだらうと。斯う信じて宜しい。舍利弗が必ず佛に成れるといふ見極めがついたのであるから、自分達も舍利弗には及ばないでも、努めてやまなければ必ず佛に成れる、だから自分達も作佛を得ると信じて宜しい。さうして世間のありとあらゆる命のある者の中で一番上の者に成れるのである。

佛道は思議し叵し　方便して宜しきに隨ひて說きたまふ
我が所有の福業　今世若は過世
及び見佛の功德　盡く佛道に回向す

（佛道叵二思議一　方便隨レ宜說　我所有福業　今世若過世　及見佛功德　盡回二向佛道一）

佛に成れると仰しやるが、併しながらその佛に成る道といふものは、なか〳〵普通の人間が考へても容易に呑み込めるものでないから、それで佛樣は方便を以て、宜しきに隨つてだん〳〵淺い所から深い所へ、即く者の機根に應じ力に從つて說いて、一番終ひに佛に成れるといふ所まで說いて下さる。だから一つ自分達もこれから奮發しよう。我が所有の福業——自分のあらゆる善い行ひ、それはこの世にやつた事もあり、また前の世にやつた事もある。或は又見佛の功德——見佛といふのは佛と俱に居る心持です。だん〳〵佛の教を學んで深く信じて來ると、何となしに佛と一緒に居るやうな心持になる、それが見佛です。初めはいろ〳〵な事を學んで、骨折つて考へるのですが、だん〳〵修行の結果は見佛になる。即ち佛と俱に居る心持になるさういふやうな心持になつたその功德、それらを皆こと〴〵く佛道に回向する。

回向するといふのは、自分が佛の境界に到達するその大目的に皆役立てるといふことです。回向といふことは自分の爲にも言へば人の爲にも言ひます。自分の爲に回向するといふのは、一切のものをこの一つの事に皆役立てるといふ意味です。人を救ふとか、教を學ぶとか、解するとか信ずるとかいふことを、皆自分を佛にするといふ此の事に役立てることを言ふ。それから人の爲に言ふ時には、自分の受くべき功德を人に振り向けてやる、讓つてやるといふ意味に使ひます。こゝでは自分の爲に言つて居ります。自分達が永い間修行したその一切の骨折を盡く佛道に回向する。それ等が皆集つて、結局は自分達が佛と同じ境界に到達するといふことを今こゝで信じよう、斯ういふのであります。

これで授記のことは一段落になつたのでありますが、更に舍利弗が申すには、自分はよく解りましたが、しかし自分よりモット機根の劣つて居る者は今よりお前達は菩薩の行を積んだら必ず佛に成るといふやうな教だけではまだ本當にさういふ氣分になれさうもない。ですから自分よりモット機根の劣つて居る者の爲に、モウ少し丁寧に說き明して下さいといふことをお願ひする。それだけ舍利弗自身が偉くなつたのです。自分一人佛に成つても、それだけでは滿足しない。他の自分よりも智慧の足らない者にも一つ教へて戴きたいといふことをお願ひ申すの

であります。

爾の時に舍利弗　佛に白して言さく　世尊　我今復た疑悔無し　親り佛前に於て阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得たり　是の諸の千二百の心自在なる者　昔學地に住せしに　佛常に教化して言はく　我が法は能く生老病死を離れて涅槃を究竟すと　是の學無學の人　亦各々自ら我見及び有無の見當を離れたるを以て涅槃を得たりと謂へり　而るに今世尊の前に於て　未だ聞かざる所を聞きて　皆疑惑に墮せり　善い哉世尊　願はくば四衆の爲に　其因緣を說きて疑悔を離れしめたまへと

（爾時舍利弗　白レ佛言　世尊　我今無二復疑悔一　親於二佛前一　得レ受二阿耨多羅三藐三菩提記一　是諸千二百　心自在者　昔住二學地一　佛常教化言　我法能離二生老病死一　究竟二涅槃一　是學無學人　亦各自以離二我見　及有無見等一　謂レ得二涅槃一　而今於二世尊前一　聞レ所レ未レ聞　皆墮二疑惑一　善哉世尊　願爲二四衆一　說二其因緣一　令レ離二疑悔一）

舍利弗が申すには、自分はモウ疑ひません。菩薩の行を積んで參れば佛に成れるといふことをシッかりとお教へ下さつて、今親しく佛樣から授記を得て後には佛に成れるといふ約束をして戴いたのですから、自分にはモウ何の疑ひもありませんが、茲にまだ千二百人ばかりの者があります。これは所謂阿羅漢です。『心自在なる者』といふこともいろ〳〵な意味に使ひますが、こゝでは煩惱を離れた意味に使つて居る。所謂繫縛を離れるといつて、煩惱に繫がれ縛られて居る狀態を先づ脫した者のことです。

その千二百人の羅漢は、昔學地に住して居た、學地とは佛の教をまだ〳〵修行しなければならない境界のことです。此の學に對して無學といふのは、學ぶべき事が無くなつた者、即ち一通り修行の濟んでしまつた者といふ意味になる。俗語では無學といふ

と宜くないが、これは逆です。其の千二百の者は今では心自在で迷ひがなくなつて居るのだが、以前にまだそこまで行かないで、迷ひとはどういふものだらうとか、迷ひを離れるにはどうしたら宜いかといふやうなことを一生懸命學んで居る境界に居つた。その者に對して佛樣は常に、『我が法は、能く生老病死を離れて涅槃を究竟す』と斯う仰しやつた。佛の教といふものは生老病死、即ち無常なる世間のいろ〳〵な變化を離れて、さうして涅槃といふのは所謂滅です。苦みや惱みや罪を滅する力を本當に與へるものだと仰しやつた。そこで學無學の人——まだ學んで居る者、或はモウ學ぶ必要がなくなつて心に自在を得たやうな者は、各々我見及び有無の見等を離れたので、自分達はモウ涅槃を得たと思つた。我見といふのは常に自己を中心として物事を考へること。それから有無の見といふのは斷見、常見といふのと同じで、斷見は物の變る方ばかりを見る一方の偏つた考へ。常見は物は變らない、いつでも同じだといふやうにのみ見る、一方の偏つた考へです。普通の迷ひといふものはそれでせう。さういふやうな普通の誰にもあり易い、凡夫に通有なところの煩惱を離れたので、これはモウ涅槃を得た、眞のさとりを得たと思つて居た。

ところが佛は今になつて、それはまだ本當のさとりでないと仰しやる。今佛樣の前で伺つて見ると、たゞ凡夫の境界を離れただけではいけない。所謂菩薩の行を積んで、一切衆生を救ひ、一切衆生を護り一切衆生を助けるといふ働きをズッと續けて行つた者でなければ本當の滅ではないと仰しやる。さうして見ると前に伺つたところと大分程度が違ふのであつて、皆疑惑に墮せりで、前に伺つた事とは大分違ふナ、どういふものだらうと思ひ惑うて、みな茫然として居ります。願はくばこの者達の爲に因緣を說いて、その譯をモウ少し詳しく說き明して、彼等の

疑ふ心持を除かせるやうにして戴きたい。斯う言つて舍利弗が非常な優しい慈悲の心持を以て、他の小乘の教を學んで漸く一通りの迷を離れた者共の爲に重ねて佛の說法を願つた譯であります。

爾の時に佛舍利弗に告げたまはく　我先に諸佛世尊種々の因緣譬諭言詞を以て方便して法を說きたまふは　皆阿耨多羅三藐三菩提の爲なりと言はずや　是の諸の所說は皆菩薩を化せんが爲の故なり　然れども舍利弗　今當に復た譬諭を以て更に此の義を明すべし　諸の智有らん者譬諭を以て解ることを得ん

（爾時佛告二舍利弗一　我先不レ言ヲ諸佛世尊　以二種種因緣譬諭言詞一　方便說レ法　皆爲ヵ阿耨多羅三藐三菩提ト耶　是諸所說　皆爲レ化二菩薩一故　然舍利弗今當ヲ復以二譬諭一更ニ明ス此義ヲ　諸有レ智者　以二譬諭一得レ解）

此の舍利弗の顧ひを聞かれて、佛樣が舍利弗に告げられるには、それは前にも言つたではないか。自分が前にいつた通り、諸佛世尊はいろ〳〵の因緣譬諭言詞を以て方便の法を說く。いろ〳〵低い教も高い教も、淺いのも深いのも說くけれども、その教を說くのは　悉く一切の人間を佛の境界に導いてやる爲だ。そのことを覺えて居るだらう。それだから、今までの諸〳〵の所說は皆菩薩を敎化せんが爲めである。

これは前に方便品のところにハツキリ言つてあります。小乘の敎を說くといふことは、菩薩の行を積ませる準備的に說いたものであつて、小乘の敎で止つてしまつてはいかぬといふことを丁寧に說いてある。しかしながらその小乘の敎を說かないで、イキナリ大乘の敎を說くといふことは出來る譯がない。捨てられない者が與へられる譯はないのです。菩薩の行といふのは所謂一切の人を救ふ働きです、が救ふといふ働きをする爲には、その前提としては小い

自分の欲を捨てることが出來なければならない。但し捨てるといふのは『捨てられる』といふことで、捨てないでよい時には捨てないでも宜いが、捨てなければならぬ時にはいつでも捨てられるといふのでなくてはいけない。是非不味い物を食べなければならぬといふことはない、時には美味い物を食べても宜いが、美味い物を食べられない時には不味い物を食べて平氣で居られる心持でなければいけない。綺麗な著物を著ても惡くないけれども、綺麗な著物が著られない時には汚ない著物でも平氣で居られなくてはいけない。決してヒネくれるのではない。これを下手に考へるとヒネくれて、金などは無い方が宜いと言ふ、それは嘘です。有る方が宜いにきまつて居る。金が無ければ電車にも乘れやしない。有る方が宜いのだけれども、しかし無くても宜い。どうかして無くなつた時には無くてもそれに安んずる。さういふ心持がシツカリ据はつて居なければならぬ。その心持が非常に大切です。地位でも身分でも人が與へたら貰つても宜い。人が尊敬したら尊敬されても宜い。しかし何時でも捨てられなくてはいけない。是非喰り付いて居てはいかぬ。どうしても地位が無くては氣が濟まぬ。どうしても大きい勳章をブラ下げなくては承知しないといふのでは困る。だから物を捨てられる心持、その心持があれば施すといふ心持は無論出來て來る。そこから養はなければいけない。小乘の敎を通つて大乘の敎に入るのはそれであつて、要するに捨てられる心持があれば、今度は捨てるだけではない、施したい、與へたいといふ心持になる譯です。

それ故に佛は先づ以て低い方の、所謂煩惱を除くといふ敎から說くのだけれども、その煩惱を除くといふことは世の一切の人を救護する働きをする準備的の意味で說くのであるから、本當の意味で言ふと、今まで說いた有らゆることはみな菩薩の行を實行さ

せる目的で說いたのであるけれども、成程機根の低い者があるから、其の機根の低い者にはそれだけでは解るまい。それではこれからその意味を少し敷衍して譬諭を以てこの義を明さう。智あらん者は譬諭を以て解ることを得ん。今より譬諭を說くから、其の意味が能く解つたならば、大乘の敎を學ばなければ、小乘の敎だけではまだ十分ではないのだといふことが本當にわかるだらうと言はれた。そこで此より有名な火宅の譬を說かれる譯であります。

舍利弗　國邑聚落に大長者有らん　其の年衰邁して財富無量なり　多く田宅及び諸の僮僕有り　其の家廣大にして　唯だ一門有り　諸の人衆多くして一百二百　乃至五百人其の中に止住せり　堂閣朽ち故り　牆壁隤れ落ち　柱根腐ち敗れ　梁棟傾き危し　周帀して俱時に欻然に火起りて　舍宅を焚燒す　長者の諸子若は十二十　或は三十に至るまで此の宅の中に在り　長者是の大火の四面より起るを見て　即ち大に驚怖して是の念を作さく　我は能く此の所燒の門より安穩に出づることを得たりと雖も　而も諸子等火宅の內に於て戲嬉に樂著して　覺えず知らず驚かず怖ぢず　火來りて身を逼め苦痛已を切むれども　心厭患せず　出んと求むる意無しと

（舍利弗　若國邑聚落　有二大長者一　其年衰邁　財富無量　多有二田宅及諸僮僕一　其家廣大　唯有一門一　多二諸人衆一　一百二百乃至五百人　止二住其中一　堂閣朽故　牆壁隤落　柱根腐敗　梁棟傾危　周帀俱時　欻然火起　焚二燒舍宅一　長者諸子若十二十　或至二三十一　在二此宅中一　長者見二是大火　從二四面一起一　即大驚怖　而作二是念一　我雖二能於二此所燒之門一　安穩得レ出一　而諸子等　於二火宅內一　樂二著嬉戲一　不レ覺不レ知　不レ驚不レ怖　火來逼レ身　苦痛切レ己　心不二厭患一　無二求レ出意一）

一つの譬を說かう、或る國の町に大きな長者があつた。その長者は大分老年であつて、財產や富が數限りなくあつた。多くの田もあれば家もあるし、召使ひなどもある。その家は廣大であつた、さうして唯一つの門があるのみである。これは聖書の中に耶蘇が敎を說いた中にも、天國に入る道は狹くて細いぞといふことを言つて居りますが、それと同じやうな意味です。大きな家でも方々に門が開いて居れば宜いけれども、大きい家に門が唯一つしかない。吾吾が佛の境界まで行くといふことも非常に難しい。大きな家へ狹い一つの門を通つて行かなければならないやうに、餘程シツカリ考へて居ないと、佛の本當の敎に入つて行くことは難しい。といふ意味を言はれて居ります。

その家の中には大勢の人が居る。さうしてその家は古くて垣根や壁なども崩れ落ち、柱の土臺なども腐り梁だの棟などが傾いて、而もその家のまはりに一時に火が起つて、見る〳〵その家が燒けて行くといふ有樣である。その時に長者の子供達、二十人三十人といふ大勢の子供達がその家の中に居つた。さうしてウツカリすれば其子供達は燒死なゝければならないといふ有樣である。長者は非常に驚いて斯う思つた。自分は漸くこの燒けさうな家から安穩に出ることが出來たけれども、あの子供達は燒け掛つて居る家の中で戲れ遊んで居る。さうして覺えず、知らず、驚かず、怖ぢず、一向平氣で居る。

同じ平氣で居るのにもいろ〳〵ある。火が燒けて來るのをまるで氣がつかない者もある。或は燒けさうだと氣がついてもハツキリ知らない者もある。或は知つて居てもナーニ大したことはあるまいと思つて驚かない者がある。或はビツクリしても、これは命に關はるといふほどではないと思つて怖がらない者もある。これは人生の無常を知ることに譬へられて居る。人生は無常であつて、吾々の生命にも限り

がある。ウツカリすれば一生無意味に暮さなければならぬといふことが、ボンヤリわかつて居ても本當にわからない者があるといふことです。ドン〳〵火が燒けて來て自分の身に迫つて、ウツカリすれば燒け死ぬといふやうなことが自分の側まで迫つて來て居るのだけれども、それでも恐しいものだと思はないから、そこを逃れ出ようといふ心持がない。

これとよく似た譬が優陀延王經といふ經の中にあります。人が道を歩いて居たところが後ろから象が追つ掛けて來た。踏み潰されては堪らぬと思つて頻りに何處か逃げる所を搜して居ると、道の側に井戸があつてそれは中に水のない空井戸であつた。どうも他に逃げる所がないからその井戸の中へ入つて、井戸の石垣のやうな所に足を踏みかけて、そこに木の根があつたからそれに獨まつて、さうして象をやり過さうとした。ところが象は追かけて來たけれども、身體が大きいから井戸の中へ入れないで、上から覗いて居る。人間はブラ下りながら早く象が行けば宜いと思つて、ヒヨツト下を見ると、下には恐ろしい毒蛇が居て、落ちて來たら食はうと思つて口を開いて居る。さうして又見ると白い鼠と黑い鼠とが二ひき代る〳〵に出て來て、自分の獨まつて居る木の根をボリ〳〵噛つて居る。この木の根が切れると下へ落ちてしまふ、下へ落ちれば蛇に呑まれる。上へ出ようと思へば象に捕まへられる。どうしようかと思つたところが、ヒヨツト見るとその根の上に木の枝が出て居つて大變美味さうな實がなつて居る。その實から汁がボタリ〳〵落ちて來る、それを口で受けて甜めて見ると非常に甘い。そこでその人は、その實の甘いのをスツカリよろこんで、木の根を鼠が噛つて居ることも、蛇が待つて居ることも、象が上から覗いて居ることも忘れてしまつて、夢中になつて甘い汁を甜めて居るといふ有名な譬があります。

お釋迦樣はその譬をお說きになつて、お前達の日日やつて居る事はそれではないか。白い鼠と黑い鼠といふのは晝と夜のことで、晝と夜が代る〳〵に今日、明日、明後日と來る間に、お前達の命の根はだん〳〵噛み切られて先が短くなる。だからその生きて居る間に何とか覺悟を定めなければならない。然るに人生のつまらない樂しみに執著して、チヨウド甘い木の實の汁を甜めて居るやうで、命の根のだんだん無くなつて行くことも知らない。又その人生の無常を知るといふ智慧分別も無いといふことを敎へて居られる。是れが有名な月日の鼠といふ譬であります。

それと思ひ合せて見ると、私共もウツカリして居ると斯ういふやうなことで、人生の無常なことは知つては居るが、實際はまさかと思ふ間に一生を空しく過してしまひます。私なども永い間お經を讀んだりして、人生無常だグラヒのことは知つて居ります

が、まさか今夜死ぬとは思はない。この間も友達が集つた時に、舊い友達が死んだ話をして、『この次は誰の番だらうナ』と冗談を言つたのですが、誰もこの次は自分だとは思はない。まア此方へはなかなか廻つて來やしないと思つて居る。自分も何時死ぬかわからぬし、人にも何時死に別れるかわからぬといふことは、解り切つたことでありますが、こんな解り切つた事が割合にわからないで居るといふのは實際愚なことだと思ひます。しかしそんなことを幾ら語りあつても、やはり腹の中ではまさかと思つて居るのですが、よく考へて見れば此の問題を第一に考へなければならない譯です。

舍利弗　是の長者是の思惟を作さく　我身手に力有り　當に衣裓を以てや　若は几案を以てや　舍より之を出すべきと　復た更に思惟すらく　是の舍は唯だ一門有り　而も復た狹小なり　諸

子幼稚にして未だ識る所有らず　戯處に戀著せり　或は當に墮落して火に燒かるべし　我當に爲に怖畏の事を說くべし　此の舍已に燒く　宜しく時に疾く出て火に燒害せられしむること無かるべしと　是の念を作し已りて　思惟する所の如く　具さに諸子に告ぐ　汝等速かに出よと

（舍利弗　是長者作二是思惟一　我身手有レ力　當レ以二衣裓一　若以二几案一　從レ舍出レ之上　復更思惟　是舍唯有二一門一　而復狹小　諸子幼稚　未レ有レ所レ識　戀二著戲處一　或當二墮落一　爲二火所レ燒一　我當二爲說一二怖畏之事一　此舍已燒　宜二時疾出　無レ令レ爲二火　之所二燒害一　作二是念一已　如レ所二思惟一　具告二諸子一　汝等速出）

そこで長者が考へるには、自分は身にも手にも力があるから、いろ〳〵な道具を以てそこから逃出すことも出來る。衣裓といふのはよくお寺でお葬式の時などに使ひますが、花を盛る器です。それから腦息のやうなものとか、或は机とか、家の内にあるいろな家具を持つて此處から出ることも出來る。しかし自分一人で逃げ出して見たところで仕方がない。此の家の門は實に狹くて、タッタ一つの門があるばかりである。さうして子供達は一向火が恐ろしいといふことを知らないで、自分の樂みに執著して居る。或はウッカリふざけて居る間に火の中に落ちて燒かれるかも知れない。それがドウモ心配でならぬから、自分は一つあの子供達に警告をしてやらう。ウッカリして居ると火に燒かれてエライ目に逢ふぞといふことを話して、モウ直に此の家は燒けるのだから早く出て來て、火に燒かれないやうにしろといふことを知らせてやらうと考へて子供等に向つて大きな聲で『お前達はやく出て來い』と言つた。

父憐愍して善言をもて誘諭すと雖も　而も諸子等嬉戲に樂著して肯て信受せず　驚かず　畏れず　了に出る心無し　亦復た何者か是れ火　何者か爲れ舍　云何なるをか失ふと爲すを知らず　但だ東西に走り戲れて　父を視て止みぬ

（父雖二憐愍　善言誘諭一　而諸子等　樂二著嬉戲一　不二肯信受一　不レ驚不レ畏　了無二出心一　亦復不レ知二何者是火　何者爲舍　云何爲レ失一　但東西走戲　視レ父而已）

父の長者は子供達を可哀想だと思つて、はやく出て來いと言ふけれども、子供達は敢て信受せず、自分達の遊びが面白いものだから、親父が危い〳〵と言つても信じない。さうして驚きもせず、畏れもせずして、どうしても出ようとしない。又火と言つてもドンなものだか知らない、家と言つても家の樣子がドウだか知らない、又どうして燒け死ぬといふやうな酷い目に遇ふかといふことも知らない。唯だ東西に走り廻つて火を見てボンヤリして居るだけの話である。

これは佛樣が實際吾々衆生を御覽になつた時の心持を、實に能く寫してあると思ふ。どうも歯痒くて歯痒くて堪らない。火に燒かれるぞと言つても、火といふのが何だか知らない。家が危いと言つても、家がどうだか知らない。燒け死ぬといふことはどういふ事だか知らない。さうして唯ふざけて騒いで居る。實に歯痒くて堪らない。佛が吾々の日常の生活を見られたら確にさうでせう。何故あんな馬鹿な事をして居るか、どうして氣が付かないかと思はれるでせうけれども、此方は氣がつかないで詰らない事で騒いで居る譯です。

父を視て已みぬ、たゞ親父を見て居るばかりだといふのは面白い言葉です。子供は親父が何か吃言を言ふと、『親父何か言つてるナ』と思つてたと見て居る。吾々もチャウドさうです。佛樣がいくらどんな教を與へられても、人間がボンヤリして見て居る。何か言つてるナ、厄介なことを言つてるナ、そんなことを習つても解りはしないと思つて見て居る。子

供がふざけながら親父を視て居るやうに、いくら言はれても氣がつかない。

爾の時に長者即ち是の念を作さく　此の舍已に大火に燒かる　我及び諸子　若し時に出ずんば必ず焚かれなん　我今當に方便を設けて　諸子等をして斯の害を免るゝことを得しむべしと

（爾時長者　即作二是念一　此舍已爲二大火所レ燒一　我及諸子　若不二時出一　必爲レ所レ焚　我今當レ設二方便一令二諸子等一得レ免レ斯害上）

そこで仕方がないから長者は斯う思つた。この家は既に大火に燒かれて居る、若し子供等が間に合ふ時にこの家から出なければ、必ず火の爲に燒かれてしまふのだ。しかし出ろと言つても出ない以上は已むを得ないから、方便を用ひて、子供達をしてこの害を免れしめようとお考へになつた。

こゝで考へなければならぬことがある。信心といふものは、信心が尊いから信心するといふのが本當でせう。けれどもそれでは普通には解らぬから、いろ〳〵な所から信心に入つて行くやうに勸める。信心をすれば苦みがなくなるとか、信心をすれば幸福が來るとかいふのですが、本當は有難いから有難い、信ずるから信ずるといふ、それだけの話です。であるから一番終ひに行ければそれになります。本當の信心といふものは唯だ信ずる、唯だ有難いといふことになる。けれども初めはサウは行かないのですから、いろ〳〵低いところから、信ずれば斯うなる、斯ういふ幸がある、信ずれば斯ういふ苦しみが除かれるのだといふやうに說かれるのでありませう。但しどんな方法で說いても、煩惱を增長せしめるやうなことで誘つてはいけない。この事はハッキリして置かなければならぬ。とても初めから難かしい事では解らないから、極く低いところから行けといふので、煩惱を增長せしむるやうなことを言つて、それで道に入れても宜いだらうと思ふ人もあるが、それ

はいけない。煩惱を增長せしむるやうな敎をだんだん注込んで行くと、本當の所に行き著けないで、スッカリいけなくなつてしまふ。それですから信心したら金が儲かるとか、信心して往來を歩いたら墓口を拾ふとか、こんなことを說いてはいけない。人の迷ひを除かせる方法から說かないで、煩惱を增長せしむる方法で說いたのでは、畢竟本當の信仰といふものには入り得ない。そこは間違へないやうにしたいものだと思ひます。世間ではよくさういふ事を言ふ人がある。『ナーニ是れも方便だから……』と言ふが、しかしつまらない事でやつて居ると、いつまでもつまらない事でお終ひになつてしまふ。佛の敎の中にはそんなのはありませぬ。どんな低い敎でも信心したら儲かるとか、信心したらうまい事があるなどといふことはありませぬ。

元來方便といふのは、眞實の道に到達し得るものでなければ方便でない。出鱈目な、つまらない敎を方便だナンと言つて敎へれば、眞實の道に遠ざかつてしまふ。どんな方便でもその中から眞實の道に通ふのでなければならない。眞實の道を離れるやうな道を指示すならば、それは方便といふものではない、人を欺し人を陷れることであります。よくいゝ加減なことを言ふ人があつて、

わけのぼる麓の道は多けれど
　おなじ高嶺の月を見るかな

といふ歌があるぢやないかと言ひます。若し分けのぼる麓の道がみな高嶺に行けば宜いけれども、高嶺に行かない道もある。谷底へ行く道もあれば、横へ外れる道もある。そんな道をいくら行つても高嶺に行けやしない。だから何でも宜いといふものではない。ドンナ方便でも、それ眞實の道に通つて行くべき方便でなければ、方便として價値がないといふことをハッキリして置かなければならない。チョウド東京から汽車に乗つて京都へ行くやうなものです。

その間にはステーションが幾らもある。品川もあれば横濱も大船もあるけれども、結局このレールを傳つて行けば京都まで行けるといふのでなければならぬ。幾ら近い所でもこのレールに繋つて居ないなら京都へは行けやしない。如何に卑近な教であつてもそのステーションは京都へ行くレールの上になければならない。京都へ行かないレールでは京都へは行けない。方便の教が幾ら低くてもその教が眞實の道に通ずるやうに開かれて居なければ、方便としての價値がない。何でも方便だといふのはいけない。これも方便、あれも方便といつて、まるで人を見當違ひの所に引つ張つて行くやうな方便は、方便として價値はないのです。

さういふ譯で、今こゝでは父親が子供達の心をよく察して、方便を用ひてその火の中から救ひ出すといふことになります。その方便が所謂聲聞、緣覺、菩薩といふ三乘の教であるが、眞實は一乘の道である。それで一乘眞實、三乘方便の說明をこれから始めようといふ譯です。一乘といふのは佛に成る道、一切衆生悉く佛と成るといふのが眞實の教であつて、その眞實の教に到達する方便として、三乘即ち聲聞、緣覺、菩薩の三つの教を說いて行く。それを車に譬へて說くといふのが、これからの話です。

此の一乘眞實、三乘方便の思想は法華經ばかりではない、何れの經を讀んでも、聲聞としての修行、緣覺としての修行、菩薩としての修行といふものは、皆佛の境界に到達すべきものだといふことは說いてあります。しかし法華經に特別の點が何處にあるかといへば、それは後に壽量品を讀めばわかる譯ですが、その佛といふものが空から降つた佛でも何でもなくして、吾々と同じ肉身を取つて此の土の上に生れたお釋迦樣を通して唯一の佛を見ようといふ、そこが法華經の特別のところでありますが、それは後で申します。兎に角大乘の經典であれば一乘眞實、

三乘方便の思想だけは說いてある。たゞ法相宗などでこれを逆に取つて、三乘眞實、一乘方便といふことを今でも言つて居る。あれはチョット珍らしい。その方便を三つの車に譬へて、羊の挽く車と、鹿の挽く車と、牛の挽く車といふものを聲聞と緣覺と菩薩に譬へ、さうして佛に成る道を大白牛車に譬へるといふ話がこれから始つて來る譯です。

此の譬喩品の火宅の譬といふのは有名な話になつて、三界は火宅の如しといふことを、法華經など知らない人でも話すやうになつて居ります。その火宅といふことの意味は前に申上げたやうに、世の中は無常である、ウツカリして居ると、うしろから火が燒けて來て落著いて居ることが出來ないと同じやうに、命が長いと思つて居ると何時の間にか死んでしまふ、金があると思つて居ると何時の間にか貧しくなり、勢力があると思つて居ると何時の間にか勢力を失ふといふことは、世間に始終あり勝ちの事實であります。さういふ事を平常から考へて置いて、假令さういふ變化があつても驚かないやうにすることが必要である。それで世の中が無常だといふことは世の中に對して失望するとか、或は落膽するやうにといふ意味ではないのであつて、變化があるといふことを豫め考へて居れば、變化があつたところが驚かないで濟む、變化が無ければ尙ほ結構だといふことになる。一番惡い狀態を考へて置くといふことは人間が修養する場合に於ては何より大事なことです。天氣が惡い積りで傘を用意して出かけて行つて、天氣が好ければ文句はありはしないが、天氣が好い積りで出かけて急に雨が降つて來るとあわてるものです。だから人生の無常を說かれたのです。それは八十までも九十までも命の續く人もありませうが、今晩死んでも驚かない覺悟を決めて置くことは必要である。何時までも繁昌する人もありませうが、急に衰へても驚かない覺悟を決めて置くことは人間の

修養上に於て大事な事です。さういふ意味に於て三界は火宅のやうである、うしろから火がついてくるやうに何時でも思つて居なければならぬといふ、此の教は、假令佛教を深く信じない者でも、誰にでも適切だといふことが言へるだらうと思ひます。しかし吾々はッとさういふ事は忘れ易いものですから、その時になつて驚くのですが、それを初めから考へて居れば、イザといふ時になつて何も驚くことはない譯です。譬諭品にはその事を說かれて居ります。

それで三界は火宅の如くである。ところが多くの人はさういふことに氣が付かないから、ウツカリして居る。そのウツカリして居る人間に對して、佛樣が御自分で考へて居らつしやるやうな高尙な教を與へようと思つても、佛の境界と凡夫の境界とは餘りに懸け離れ過ぎて居りますから、さういふ高尙な教は耳に入らない。そこで所謂方便を以て低い方からだん〳〵と教へて行つて、結局は佛樣のお覺りになつたところを皆に解らせるやうにしようといふのが、今までの一般の話の趣意です。すなはち『方便を設けて、諸子等をして斯の害を免るゝことを得しむべし』と思つた。普通の事ではいかぬから色々な方法を設けて、兎にも角にも子供達が火に燒かれて死ぬ事だけは免れさしてやりたいと、親の慈悲として思つたといふのであります。

合掌瞻仰の態度

——芭蕉の句を一例として——

笹木欣爾

○

貞享四年、芭蕉は四十四回目の春を粗末な江東の草菴に侘びしく迎へました。彼は總べての點に貧しかつたのです。住居は、ほんの鳥渡した雨にもそここゝが漏りますし、少し强い風が海から吹き當てゞもすれば、屋根が直ぐ飛ばされて了ひさうでした。身體は性來餘り健康に惠まれて居りませんので、いつでも何處かしら惡い所のない時はありません。肝心の生活と申せば、多少とも彼に緣のある人々からの附屬に依つて、細々と保たれてゐるのでした。芭蕉には妻もありません、子もありません、身寄りとて遠い鄕里に少しあるばかりで、近間には一人も居りませんでした。それに近頃の生活の乏しさと來ては、乞ふて食ひ、貰ふて食ふと云ふ有樣で、未だ曾つて味つたこともない程の窮迫さでした。全く何に於ても、總べてに貧しい彼であつたのです。

でも、芭蕉の心境は、貧しさとは反對に、貧しくなれば貧しくなる程、いよ〳〵ます〳〵冴えて行きました。彼は貧しさに不自由を感じても、その心までは曇らされませんでした。それ處か却つて、貧しい內にこそ、己れの魂の本當の安住地を見出したのでした。芭蕉の內面生活は、その惠まれぬ外面生活とは似もつかず、今や不惑の年を越して漸く圓熟

の境へまで近付きつゝありました。

春です。陽氣はどことなく暢び〳〵として、草や花は一齊に微笑み始めました。人の心も何とはなしに浮はつき出しました。草菴に獨り佗びしい生活を營む芭蕉にも、矢張り春には春のおほらかさが感じられるのでした。別に菴を遠く出て行かなくても、春の體臭はあたりそこいらに、充分嗅ぐことが出來るのでした。

一日、彼は音なふ人もないまゝに、朝から狹い草庵に閉籠つてしみ〳〵と閑を貪つて居りました。すると、見るともなしに、坐つてゐるすぐ前の古びた垣根の一隅に、小さな白い花を一杯つけた菁のあるのに眼をとめました。そしてそれに見入るのでありました。絢爛、美を競ふ春の花の中にあつて、これは又誇るでもなく衒ふでもなく、さればとて歎くでもなく、喞つでもなく、たゞ咲くがまゝに愼ましく細やかな花を一杯につけて、嫋々たる春光を浴びてゐる菁、古びた垣根に添ふがために、一入と趣きの加へられた菁の姿、彼はよく〳〵見入つてゐる内に、そのおくゆかしい風情に心から吸ひ付けられて了ふのでありました。普段いつでも見慣れてゐる垣根と、雜草の一種にしか過ぎない菁の小さい花と、この二は特に取り立てるには餘りに平凡過ぎはいたしますが、よく〳〵見入る時、そこには何とも云へぬ興趣がぐん〳〵と湧き上つて來るのでした。

芭蕉は、つく〳〵と見入る内に、芬郁とした情緒につゝまれて了ひ、一種崇高な靈感をさへ、どこか意識の奥底に覺えるのでありました。

よく見れば菁花さく垣根かな

○

以上は、芭蕉の句を元として、私が私の胸中に描いてみた彼の一斷面であります。芭蕉を想ふに、當らずと雖も先づ遠からざるものと存じます。私がこゝに彼の句などを取り出しましたのは、何もその作品を評せんがためではありません。此の句から、少しでも彼の澄み切つた宗教的の心境をうかゞひ、又こゝに現れた彼の尊い生活態度に、多々學ぶ處あらんがためなのであります。

申し加へるまでもありますまいが、芭蕉と云ふ人は決して單なる月並宗匠ではなかつたので、口にこそ宗教を說きませんでしたが、その心境、その生活態度、其他全く宗教的な深く高いものがありまして內心に抱懷する安心の境地を外に表現するに當り、たま〳〵十七字詩の形式を借りたと云ふに過ぎないのであつて、誠に俳聖と呼ばれるにふさはしい人なのでありました。

○

芭蕉は此の句にあつて、崇高とも云ふべきその感興を吐露いたして居りますが、それでは果してどんなに珍らしい尊嚴なものを見てゐたのでありませう。見てゐるものは、たかゞ菁の咲いてゐる古びた垣根なのであります。俗にペン〳〵草に云はれる雜草のなづな、朽ち果てんとしつゝある粗末な垣根、平凡陳腐、此の上もありませぬ。こんな程度の平凡な情景なら、私共はいかなる賤が伏屋にもザラに見受ける處であります。が、この平板さが、芭蕉の眼には崇高な莊嚴美へと飛躍したのでありました。陳腐平板な一情景が、かくも崇高化されようとは、驚くにもたえるのであります。どうすればこうも變つたのか——と、此の句を讀み返しまするとと、そこには『よく見れば——』と冒頭に書き出してあります。よく見たのであります。いゝ加減ではなしに、實によく〳〵見入つたのであります。芭蕉が菁の咲いた垣根をつく〳〵見入つた時、彼はそのザラにあるつまらぬ一情景から、形容をすら絕した微妙幽遠なあるものを感じ出したのでありました。そしてますま

す見入る彼には、もう日頃の憂さも貧しさも、何もかも一切がありませんでした。全く三昧無我の境地に這入り切つて了ふのでありました。よく見れば――よく見れば、菁の花咲く垣根が、芭蕉の詩眼には美くしく詩化されて、寂照明静な世界を繰りひろげて行つたのであります。

○

よく見ると云ふこと、これは何でもない様なことであつて、その實これ位私共に肝要なことは鳥渡ありますまい。よく見る時には、どんなつまらぬものでも、非常な意義や價値が出て參ります。平凡と云ひ、非平凡と云ふも、それは見られる先方に客觀的にあるのではなくして、見るこちらがよく見るかよく見ないかと云ふ主觀の一點にかゝつて居ります。平凡と云はれるものでも、それをよく見ることに依つて、平凡がそのまゝ非平凡にもなるのであります。

此の世の中は、嚴然たる因果の法則によつて、一絲亂れずに支配されて居ります。どんなものでも、どんなことでも、何一つとして種のないものはありません。何んにでもたねがあるのだとなれば、自體世の中には平凡以外の何物もないと云ふわけになりませう。前の芭蕉の場合にありましても、春になつたので菁が咲いたのであり、時を經たから垣根が古びたのであります。因果の法則でその場の有様を解すなら、全く味もそつけもない當り前の當り前になつて了ひます。けれども、此の何でもない當り前の有様をよく〳〵見るならば、そこに云ふに云はれぬ無限の味ひが醸し出されて參ります。因果と云ふ相對的規範を脱した絶對境が油然として湧き上つて參ります。因果律の支配する元にあつて、それ以上の世界に遊ぶことが出來もいたします。平凡が平凡のまゝ、平凡以上のものになつて參ります。菁の咲く

垣根と云ふ凡景が、熟視する芭蕉には、決して凡景ではなくなつたのでありました。

○

但し、此のよく見るは肉眼だけのよく見るでないのは云ふまでもありません。勿論、私共がものを見ますには、一應は肉眼の力をどうしても借りねばなりません。しかし私共人間には、肉眼の外に心の眼がある筈であります。ものを見るのに肉眼を通しはいたしても、その後には更にこの心眼を働かさねばなりますまい。よく見るとは、この心眼を働かすのにあるのであります。

ペン〳〵草と古びた垣根とは、肉眼に映ずる以上たとひ芭蕉にだとて餘り美くしくは見られなかつたでせう。ペン〳〵草はどこまでもペン〳〵草ですし古びた垣根はどこまでも古びた垣根であります。美くしい筈のものではありません。それを彼が内面的の心の眼、今の芭蕉の場合にあつては則ち詩眼を動かしましたので、餘り見た眼は美くしいと云へない菁や垣根から、始めてうるはしい詩情が湧き出しもいたしたのであります。『よく見ればなづな花咲く垣根かな』――この『よく見』るは、肉眼を踏み臺にして今一歩深い心眼詩眼を動かしての『よく見』るだつたのです。決して肉眼だけの『よく見』るでは、毛唐ありません。

外面的な肉眼は、淺い官能を刺戟いたすに過ぎません。平凡を平凡以上に置き替えるのには、是非心眼によらねばなりません。孔子は人を見るのには、視、觀、察――と、三段の見方をせよと教へて居ります。視、觀、察と見方が一歩一歩深くなつて行つて居りますが、これなども、肉眼以上に心眼を働かす可きを說いたものでありませう。淺い肉眼では、到底深い見方は出來ますまい。よく見るには、どうしても心眼にまで到らねばなりませぬ。

もし、心の眼を働かしてものをよく見ますならば、平淡平板なものに程、又一層のにほひや味ひを見出します。

○

例へば、黒い色などは、鳥渡見た眼には全く面白味のない無愛想な色であります。心浮き立つ、感多し、興ありなどゝ云ふ意味の『おもしろい』なる言葉に、私共は『面白い』と云ふ漢字を當て嵌めますが、この漢字の使ひ方通り、白とは反對の黒には全く心浮き立たず、感はなく、興も亦ありませぬ。けれども、再往よく見ますなら、黒い色位、感もあり興もあり、心は浮き立ちそうもありませんが、併し心の落ち付く色はないでせう。

書道の本格は黒墨を用ひます。趣きがあるからでせう。色は黒ばかりではありませんから、黒以外の色を使つてもよさそうなものを、古來書に黒色の墨を使ふのは、矢張り黒には黒の無限の味があるからなのではありますまいか。或は一歩譲つて、支那では黒墨が最も造り易かつたのかも知れぬと云ふ前提を置いて見た處で、どうしても書は須く黒色でなければならなかつたと思ひます。

黒一色の濃淡緩急のみに依つて、自然の妙趣を髣髴せしむる南書の限りない味ひに思ひを寄せずに居られません。極彩華麗の密書は、一見强烈な刺戟を受けても、鑑賞者の主觀を働かす餘地のない程に多色燦爛と描き切つてあるので、刺戟は終に肉眼だけの刺戟に終り、深い心に達するまでの印象はあたへませぬ。淡々たる南書の墨味は、その極まる處を知りません。

其他實例を擧げ始めれば遑のない程、黒色の深みはそれからそれへと掘り出されて參ります。鳥渡は無味單調平板に思はれる黒色の興趣は底がないと申しても、けだし過評ではないでせう。これと申すも、平板な色なるが故に、反つて反撥的に益〻趣きが出て來るのであります。

が、肉眼だけで見る黒い色には、何と云つても面白味はありません。字義通り暗い感じにとざされて了ひます。肉眼から更に心の眼を、こゝでは鑑賞眼審美眼と云つた樣な一種の心の眼を動かすことに依つて、初めて黒色の内に深いにほひや味ひが出て來るのであります。

心の眼を使へば、鳥渡引き合ひ出した黒色に於てさへ、已にかくの如く然りであります。他は以ておして知る可きでありませう。

○

ものをよく見るのには、肉眼と共に心眼が動かねばならぬのですが、その心眼が好意的に働くと云ふのが又必要でありませう。いくら心眼が活動しても、對象のあら探しや、揚げ足とりに向けられたのでは仕樣がありません。あら探しや、ひやかし半分の心情では、平凡はいつまでたつても絶對に平凡で、平凡以上にまでは伸びて行きますまい。平凡平淡平調は、最後まで、そのまゝ居すわりになります。

前に芭蕉の例を出しましたので、こゝにも亦その方面の話を擧げますが、俳句や和歌を讀んで、一ッの句なり歌なりが幾通りにも解釋される樣な場合には、その中で一番よく取れる解釋をいたすのが、讀む者のその作者に對する禮とされて居ります。作者に對して、どこまでも善意に出で、同情的に計ふのであります。あら探しや、揚げ足とりは、絶對に禁物なのであります。誠にさもある可きでありませう。

かゝる善意の態度は、私共の日常生活にありましても、總べてに於てなされねばなりますまい。或は惡意もないが、又善意もないと云ふ冷靜な態度が要る場合があるかもわかりません。しかし、私共の日常生活は、如何にヨリよく生きんかと云ふ一處

に其の燒點が結ばれてゐるのですから、ヨリよく生きんがために、總べてをヨリよく善意に見ることが最肝要なのではないでせうか。

芭蕉が、如何に菁の咲く古びた垣根に彼の詩眼を向けた處で、この對象にことさら惡意を寄せるのなら、崇高美はおろか、單なる美觀をさへ催さなかつたでありませう。餘り美くしくない情景を、己れの詩眼を以て善意に潤色したればこそ、神韻の漂ふ句境にも展開したのでした。第一、惡意の微塵でもきざす處には、元々詩眼なるものは動きません。詩人はその詩眼でもつて、醜なるものをも立派に美化して了ひます。詩眼とは、景觀に對する好意的な眼だとも、云つて云へぬこともありません。

私共は誰でもが一人殘らず詩的天分を惠まれてゐるのではありませんから、皆が皆、詩眼を持つてゐるわけではありませぬ。從つて又、醜を美に見直す程の力量もありません。が、少くとも、總べてに好意の眼、善意の態度は持ちたいと望んでやまぬのであります。

○

法華經譬喩品の卷頭に、合掌瞻仰と云ふ言葉があります。これは、舍利弗が釋尊の尊顏をじつと見守つた處なのです。實に此の態度こそ、私共は常にもち續けたいと存じます。見守るのは何も釋尊のみ顏でなくともよいので、私共の日常生活の萬般に、此の合掌瞻仰の心持を念じ續けたいものであります。

瞻仰の瞻の字は、普通たゞ單に『みる』と訓みますが、正しくは『仰ぎみる』の意だと、辭書には書いてあります。その一字だけでも已に『仰ぐ』意味のある『瞻』と云ふ字の前後に更に丁寧にも『合掌』とあり、又『仰』と加へてあるのですから、合掌瞻仰の四字は、その中心要目は『見る』と云ふことでも、その見る態度には、餘程深長な意味が附加されてゐるのであります。

私は以上に於て、ものを善意好意に見る可きだと書きましたが、『瞻仰』なる語はもつと端的鮮明に此の氣持を語つてくれて居ります。實際、善意に見ると申すより、こちらが謙虛な心情で一歩へり下りものに對して合掌し、それを仰ぐ樣な心持で見ると云つた方が、ぴつたりといたして居ります。合掌瞻仰——幾度も繰り返して味ひ、この氣持を本當に己れのものに消化吸收したいものであります。

合掌瞻仰の心情を念持さへいたせば、私共は日常の事每物每に、一々意義と價値とそして無上の感激とを見出さずには居られません。平凡生活、結構であります。この態度さへあれば、私共は生活して行く上に、敢へて平凡以上の何一ッをも持たんと欲せずに濟みませう。合掌瞻仰のある處、平凡生活はいつまでも平凡生活で終つてゐる道理がありませんん。そこには總て、生活の莊嚴境が涌出せねばなりませぬ。

○

芭蕉と云ふ人は、誠につゝましい人でありました。その生活態度は、全く合掌瞻仰のそれでありました。若し彼にこの態度なくしては、菁の花咲く古びた垣根が、どう莊嚴されようにもありません。こんなつまらぬものにさへ、自然の寂味を認めて、合掌瞻仰の氣持を懷けばこそ、偉大な詩境は拓かれたのであります。俳聖芭蕉の詩情と云ひ、詩境と云ふも、皆この氣持の產物に外なりません。芭蕉の生活が宗教的であつたと申すのは、實にこゝいらにあるのであります。彼が、常人には堪え可くもない終生の貧苦寒苦の中に處して、最後まで閑雅優婉の一境に止住し得たのも、誠にこの合掌瞻仰の氣持故にこそであります。芭蕉の數ある佳什は、皆、合掌瞻仰の四字

を裏づけとして、本當にうなづけます。

よく見れば菁花さく垣根かな

○

佛教では、五眼を說き、十眼を說きます。その一一の面倒な說明は二の次として、兎に角、最高の佛眼なり、又一切智眼なりを以て、此の世を見ましたならば、それこそ此の世の中は、此の世のまゝに常寂光土と映りませう。が、佛眼や一切智眼は、中中得られさうにも思へません。私共の現在の境地では、遙かに高く仰ぐのみであります。

併し、合掌瞻仰の態度なら、少し注意いたせば今すぐからでも、實行に移せます。徒に、佛眼や一切智眼の高きを羨やまずに、先づ脚下から、合掌瞻仰の四字の行を始めたく存じます。

○

法華經は何の變哲もない實に平々淡々たる經典でありますが、通り一遍の凡眼を以て見ましたのでは——。然るに、此の平淡な法華經が、一度、天台大師その他勝れた先師方の賢眼に映つた時、更に日蓮上人の睿眼に觸れた時、それはどんなになつたのでせう。敢へて私輩の喋々を要せぬ處であります。凡眼賢眼、睿眼、見られる法華經は全く一ッものでも、見る眼の相違は、法華經を上下いたさせます。

釋尊の生活された世の中も、今現に私共の生活してゐる此の世の中も、世の中そのものには何の違ひもない筈であります。嘗、釋尊は佛眼を以て世を觀ぜしが故に、安穩な御一生を送られたのであり、私共は凡眼を以て世を見るがために、不安動搖の人生を惱まねばならぬのでせう。世の中は同じ一ッ世の中でも、佛眼はこれを淨土と、凡眼はこれを穢土といたします。

かうなりますと、私共の現在持つ拙ない凡眼は直

ぐにでも扶り取つて、乞眼婆羅門へでも捧げて了ひたく思ひます。併し、よく思ひ返せば此のつたない凡眼を離れて、全然別な佛眼があるでもない樣です。凡眼と佛眼と非常な距離はある樣でも、これは結局一ッものゝ兩極端なのでありませう。そして此の兩極端をつなぐ大道は、合掌瞻仰の態度そのものではないでせうか。天台大師や日蓮上人は、この氣持で法華經を手にされたのではありますまいか。釋尊、又、この態度で世に處されたのではありますまいか。

○

ものを見るに當り、淺い肉眼を一應の踏み臺として、深い心の眼を善意好意に働かすと云ふ心情は、『合掌瞻仰』なるたつた僅か四ッの漢字に要約いたされます。そして、芭蕉の詩眼も、天台大師の賢眼も、日蓮上人の睿眼も、釋尊の佛眼も、皆、この合掌瞻仰なる第一歩に出發いたすものと思はれます。合掌瞻仰の態度こそ、私共に人生のヨリよき見方とヨリよき生き方とを與へてくれるのであります。

> 兩の時に舍利弗、踊躍歡喜して即ち起つて合掌し、尊顏を瞻仰して、佛に白して言さく、今世尊に從ひたてまつりて此の法音を聞いて、心に踊躍を懷き未曾有なるを得たり。……我等方便隨宜の所說を解らずして、初め佛法を聞いて遇即ち信受し、思惟して證を取れり。世尊、我昔より來、終日竟夜毎に自ら刻責しき。而るに今佛に從ひたてまつりて、未だ聞ざる所の未曾有の法を聞いて諸の疑悔を斷じ、身意泰然として快く安穩なることを得たり。今日乃ち知りぬ、眞に是れ佛子なり。佛口より生じ法化より生じて、佛法の分を得たり。
>
> —法華經譬喩品—

國民教育革正論

平山三藏

昭和維新ノ聲高ク、國際ノ情勢日ヲ追ツテ緊迫シ、遂ニ二・二六事件ノ大不祥事ヲ視ルニ至レリ。

コレ日本國民ニ精神的大覺醒ヲ促ス警鐘ニシテ、皇國興廢ノ機今日ニアリト云フベシ。

廣田内閣大命ヲ拜シ、身命ヲ捧ケテ昭和維新ノ大成ヲ誓ヒ、庶政刷新ニ心血ヲ注ギ、平生文相義務教育二ケ年延長ヲ期シテ起ツト。之レ多年ノ懸案ニシテ要スルニ時機ノ問題ナリ、現今上ニ財政ノ急ヲ見、下ニ農民經濟ノ急迫セルヲ如何セン、而シテ吾等ノ與カリ聞カント欲スル所ノモノハ實ニ教育ノ根本的革正ニアリ。

抑モ我カ國ノ教育制度ハ、明治初年百事渾沌タル時代ニ生レ、同廿三年教育勅語ノ渙發セラレシニ依リ其ノ歸趨ヲ明カニシ、爾來幾多ノ改善ヲ加ヘテ今日ニ至レルモノナリ。其ノ間歐米ノ物質文化ハ模倣ヨリ研究ニ、研究ヨリ既ニ創造ノ域ニ進ミ、今ヤ先進ノ彼等ヲ凌ギ、列國羨望嫉視ノ的トナルニ至レリ。

凡ソ一國ノ文明ハ、他ノ文明ト接觸スルトキ必ズヤ進歩向上スルト共ニ、他面退歩ノ伴フハ免カレザルノ數ニシテ之レヲ我カ國ニ視ルニ歴然タリ、選擧肅正ニ就キテ愼重ニ檢討スレバ思ヒ半バニ過グルモノアラン。

精神文化ヲ誇ル東海君子國ノ面目何處ニアリヤ、文明ノ惠澤ニ浴シ、教育アリ社會ノ智識階級ヲ以テ任ズルノ士ニシテ、皇國ノ威信ニ關スル問題ニ對シテ猶斯ノ如シ。一般社會ノ思想ヲ靜觀スレバ、眼ヲ掩ヒテ視ルニ忍ビザルモノ、耳ヲ掩ヒテ聽クニ堪ヘザルモノ滔々トシテ皆然リ、光輝アル文明ノ建設何ヲ以テカ望ムベキ、今日非常時局ニ直面シテ感慨轉タ切ナルモノアリ。

我カ國三百年桃源ノ夢ヲ破リテ、歐米ノ絢爛タル文化ニ接シ、驚嘆度ヲ失ヒ、崇拜ヨリ心醉ニ、唯及バザランコトヲ之レ懼レ、清濁甄別スルニ遑ナク、此ノ間ニアリテ、ダーウィンノ進化論ハ滚原ノ猛火ノ如ク、實利主義、唯物思想ハ我カ國固有傳統ノ淳風良俗ヲ根柢ヨリ覆サントス。

更ニ驚クベキハ、最高ノ學府ニシテ天皇機關說ノ横行セルコト殆ド卅年、吁、亦何ヲカ謂ンヤ、國際危機ハ日ニ迫リ、人心ノ歸趨夫レ斯ノ如シ。今ヤ日本國民ハ天地神明ニ誓ヒテ更生シ、天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼シ奉ル大覺悟ヲ決スベキノ秋ナリ。

茲ニ喫緊ノ問題トシテ教育ノ根本的革新ヲ叫バザルヲ得ザルモノアリ。熱々國民教育ノ眞相ヲ考察スレバ、歐米ノ文化ヲ攝取スルニ急ニシテ知育偏傾ノ弊ニ陷リ、是正ノ聲ヲ聽ク久シクシテ而モ其ノ效ヲ視ズ、特ニ牢記スベキハ、教育ノ門戸ヲ閉シテ絶對ニ宗教ヲ排斥セシニアリ、是レ宛モ天日ノ惠ミヲ忘レテ五穀ノ豊穣ヲ望ムガ如シ。ウイルリントン曰ク

『宗教ナクシテ人ヲ教育スルハ怜悧ナル惡魔ヲ作ル』ト、明治大帝ノ軍人ニ賜ハリシ勅諭ニ『心誠ナラテレハ如何ナル嘉言モ善行モ皆ウワヘノ裝飾ニテ何ノ用ニカ立ツヘキ』ト思ハザルベケンヤ。謹ミテ教育勅語ヲ拜スレバ『智能ヲ啓發シ德器ヲ成就ス』ト、教育ノ主眼トスル所、人間天賦ノ靈性啓發ニアルコト聖旨炳トシテ日月ノ如シ、靈性啓發ノ道如何ン、茲ニ教育ノ源泉タル師範教育制度ノ革新ニ俟タザルベカラザルモノアリ。孟子曰ク『其ノ心ヲ盡スモノハ即チソノ性ヲ知ル其ノ性ヲ知ルモノハ則チ天ヲ知ル』ト、知言ナルカナ。之レ予ノ師範教育ニ宗教哲學道德ノ專攻科ヲ設ケ、心ヲ盡シテ自己本具ノ心性ヲ徹見シ、宇宙吾ナリト透徹シ、天人一如ノ境地ニ立チテ靜觀スルトキ、天意ヲ地上ニ實現スルニ大ナル正義ノ團結ニ俟タザルヘカラザルヲ感ジ、日本國出現ノ偶然ニアラザルヲ諦觀シ、宇宙ノ靈德、皇室ニ現シテ無比ノ國體ヲ爲シ、御稜威ニ導カレテ大和魂ノ涵養ヲ視、人性觀ヨリ宇宙觀ニ、宇宙觀ヨリ國體觀ニ、國體觀ヨリ國民教育ノ心髓ヲ體得セシメ、茲ニ徹底セル國民教育振興ヲ計ルハ、今日ノ急務ニシテ百年ノ大計ナリト信ズル者ナリ。

今ヤ國家燒眉ノ問題ハ、國防ノ充實ニアリ、愛國精神ノ作興ヲ措イテ何ノ國防ゾ。聊カ卑見ヲ陳ベテ世ノ識者ノ清鑑ヲ俟グト云爾。

昭和十一年七月

記事

本部團報

盂蘭盆精靈祭並法話　本年は七月に入つて遲れた梅雨だと呟く者もあつたが、舊曆では五月であるからさう大しての異變でもないと思はれる。兎も角七月十二日、前々日迄鬱陶しい五月雨氣分も、此の日に限つて晴曇相半ばした凌ぎよい、集會にはお誘への日曜日であつた。

定刻午後二時、權大僧正鈴木日雄上人大導師となつて、文學士小西日喜僧都、和賀義見師や齋藤昭行師等臨導師で、盂蘭盆水向供養の法會が虔修された。恩師聖應院日生上人を始め、昨年は此席で導師をされた梶木顯正師、及び團員中にも新盆の方々數名もあり、其他三百に近い各家の戒名を懇ろに讀みあげて鄭重な法味を捧げ、滿堂の參詣者各位夫れ〴〵恭しく燒香されて、三時過意義深い法要は滯りなく終了した。

引續いて講演會が催され、磯部滿事氏の簡單な開會の辭に次で、小西日喜師のこの盂蘭盆に於ける有意義な法話を約二十分間要點を摘んで力說され、それより小林一郎先生は『王法と佛法』と題して、世間往々この王法なる文字に捉はれて意義を誤解せるを是正され、一時間半ばかり世法即佛法の深意を懇說された。來聽中の一青年が率直に告白されて『私はマアお盆だから義理上から參詣したので、法話講演などといふものは兎角我々素人には六かしくて、眠くなるお話とばかり思つて居たら、今日は豫想を盡く裏切られて、平易の話の中に克く自分共の急所を剔抉され、幾度となく感激せしめられ共唱する所、反省する點等あつて、こんな愉快な又有難く思つた事は、かゝる會合では始めてゞある』と。……

暑い折柄であり、多くを話す要も認めないので、最後に磯部常任理事より心から溢るゝ感謝報恩の辭を以て閉會を告げ百名の善男子善女人は各自日生上人著新刊小冊子とお菓子の御供養を懷にして夫れ〴〵謝辭を交しつゝ袂を別つた、正に五時過。

因に當日は、本多上人御遺族、沼部御一家、梶木上人未亡人、南高田家未亡人、長谷川氏等新盆會の御家族、其他市中の團員誌友は勿論、遠く千葉、市川、横濱等遠路をも厭はず參詣されたお顏を拜して、皆是れ先師遺德の光と一入涙ぐましい心地がする。其の數日後窃かに妙國寺に展墓の廻り、千葉の田舍からお墓所の案內助手として來援せる一青年の會談に、『私は毎早朝　本多上人と御一家のお墓のお水を取替へ掃除させて戴いて居ります、先頃も上人の書物、日蓮聖人正傳を三度ばかり繰返しましたが、實に偉大なお方ですね。人は生きて居る時チヤホヤされても死んで直ぐに忘れてしまはれる人と、日の經つに隨つて彌々慕はれる人がありますが、今は御生前には兎や角いへる者も、皆本多上人がお在でになればと田舍でも申して居りますよ今後は盆々人々の口にのぼることと思ひます』と、未だ話は互に盡きなかつたが、他に墓參の人も來られたので、その青年は水汲みにと走つた。

實に『人間の眞價は棺を覆ふて後知られる』といふ事實を眼前にして感慨無量である。南無妙法蓮華經。

開目鈔講義　小林先生の法華經大講座も、幸に佛天護護の許に滯りなく完結され、豫定通り七月十五日の水曜日晩から開講されたが、尤も初めの二三回は序論みたやうなもので、殊に二十二日は燈火管制の下に臨時休講の餘儀ない狀態におかれたから、本論は九月の暑中開けとなるから、御諒承來聽を切望する。

日曜日清集　六月下旬から七月十九日迄の日曜中十二日は別項盂蘭盆會を營み、其他は小西日喜、和賀義見師、磯部滿事氏等に依つて勤行、法話、座談會、法華經讀誦唱題會等が催されて各自の信念增進に資した。

棚經　七月は申すまでもないお盆の月であるから例會の外、特に各家庭棚經に小西日喜上人をお願ひした。東京の方に於てもお忙しい譯であるから、當方では九日晩高橋家の例會を機として同夜同家にお泊りを願つて、翌十日午前六時から小雨を冒しつゝ營むことになつた、恐らく朝六時から棚經を始むることは他にあまり聞かない處である。且つ又日も普通よりは早い十日からといふことは、舊習に慣れた人達には異樣に感ぜられるであらうが、吾等同信の者はかゝることには拘泥されないやうになつたのは有難い事であると思ふ。

而して磯子方面の數軒から蒔田、南太田を巡つて中區に向ひ、十數軒を濟ませて神奈川の一部に飛んで、此の日は高田家に宿られた。

十一日も前日に劣らない早起きで、遠く生麥の方面から篠原、三澤、峰岡等の邊域にも及んだ。雨あがりの炎天に諸所轉々として巡ることはなか〳〵容易なことではない。殊に奇特なことは、普通市中に見るやうにお坊さんが一人で飛込んで、十分か十五分早口にジヤブ〳〵やるのとは異つて、同信の數名が交る替る袍持ちをして、平常通り以上に懇篤な讀經唱題の法味を捧げることは、我等の歡びとする所である。本

横濱教信

年は新盆の伊藤喜造氏が最初から一貫して隨行奉仕され、その功德を夫人深信院靈に回向された。

若干の時間を繰合せて、其の一人の發言に異體同心率直に隨喜して、子安の供養塔及び岡村の伊藤、大内家墓地にも御參詣下さつたのは、一入有難い事と感ぜしめられる。信仰を同じふするものはすべてかくありたく思ふ。それにつけても吾等は各家庭講話の諸所に開催されんことを切に希ふものである。

福島支部報

六月十二日(金) 支部例會、午後七時より中村樣方にて開催講師河合陟明先生。

吾々が正法を護持せんとする時、そこに種々の困難來襲し吾吾の心身を苦しむることは必然の事であり、いかに正法を持することの難きかを、先生御自身の貴き御體驗、又我々の先覺者の法難の歷史等により例證せられ、言々火を吐くが如き熱辯を以て我々を魅了しつくした、實に日蓮門下法難の歷史を觀る時我等は涙なきを得ない。

同十三日(土) 高商鐵仰會例會

前回に引續いて法華經御講義を御願ひした。德行品第一の三項より說法品第二、功德品第三の九項に至る。續いて綱谷君の農村問題に對する意見の開陳あり。今回は會長吉松先生、高橋先生、支部の方々多數御出席下され、熱天にも拘らず盛會であつた。

二本松報

六月一日 夜於蓮華寺題目講修行。

同 四日 夜於蓮華寺社會教化談話會開催す。

同十五日 二本松佛教不染會托鉢修行。

同十七日 畫安達郡本宮町顯本教會所に於て建宗會修行す。

開宗會に就て　中島元道師

同十七日 夜於蓮華寺建宗會修行。

同十九日 午後一時五十七分戰死者遺骨三基富驛を通過す因つて出迎ひ讀經す。

同三十日 夜於蓮華寺伊豆法難會修行。

× × ×

寄附金維持及團費誌料領收

(自六月二十一日 至七月二十日)

一金五圓也　東京　山田　奕二殿
一金壹圓五拾錢也　横濱　中村　幸吉殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　青山　信市殿
一金壹圓也　同　櫻井惣右衛門殿
一金貳圓八拾錢也　遠州　玄妙寺殿
一金貳圓五拾錢也　福島　淺達　雄吉殿
一金參圓參拾錢也　東京　今成　日誓殿
一金五圓也　横濱　高田　富久殿
一金壹圓五拾錢也　同　中村　幸吉殿
一金參圓也　同　高部　靜子殿
一金貳圓五拾錢也　東京　內倉　治吉殿
一金壹圓貳拾錢也　福井縣　横山五郎左衛門殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　福原　脩殿
一金壹圓也　同　小峰　豐子殿
一金貳圓五拾錢也　東京　佐藤大太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　富山　岡　爲太郎殿
一金貳圓五拾錢也　久留米　平岡　銘郎殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　富田　清子殿
一金拾圓也　東京　笠間　信語殿
一金貳圓貳拾錢也　同　長谷川義一殿
一金貳圓五拾錢也　同　深澤　紀文殿
一金貳圓貳拾錢也　横濱　中村　榮二殿
一金壹圓也　同　田村金太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　小田原　三橋　會要殿
一金貳圓五拾錢也　千葉縣　川村　善助殿
一金貳圓四拾錢也　青森　柏木　吾市殿
一金四圓也　東京　松岡　ふゆ殿
一金六圓也　同　市川菊十郎殿
一金貳圓也　岡山縣　有田　寛英殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　西田　力殿
一金貳圓貳拾錢也　同　河本　梅藏殿
一金貳圓也　同　沼部彌太郎殿
一金參圓也　同　大原　行道殿
一金參圓也　東京　何某殿
一金參圓也　同　何某殿
一金參拾錢也　千葉縣　平山　三藏殿
一金參圓也　東京　力石　林藏殿
一金參拾圓也　横濱　中村　幸吉殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　芝　信一殿
一金壹圓五拾錢也　横濱　吉村　頼治殿
一金貳圓五拾錢也　神戸　舟橋　英一殿
一金四圓四拾錢也　東京　米山　平作殿
一金貳圓貳拾錢也　同　川添　道塲殿
一金貳圓四拾錢也　横濱　松田　常榮殿
一金貳圓五拾錢也　福島　岩井　憲殿
一金貳圓五拾錢也　同　金澤　利江殿

右難有入帳仕候也

財團法人統一團會計

清水龍山　守屋貫教
鈴木一成　中谷良英
榊原久遠　共編

新修略註 日蓮聖人遺文集

再版改訂

内容見本呈上

科段別註 御遺文百廿余編（脚註入）

御義口傳
御講聞書
妙行要文集
一日一訓
聖語字解

体裁　装幀
巻頭挿入クリームアート寫眞版七葉
四六版　縦六寸二分　横三寸五分
紙數　千百十四頁
特製　總皮　三方金
並製　總クロース　天金
函入最上美本

定價　特製　三圓八十錢
並製　二圓八十錢
送料　廿一錢

發行所　東京市日本橋區江戸橋二ノ六（明正ビル）
久遠閣
電話日本橋三〇三一七番
振替口座東京七二八〇六番

暑中御伺

毛織物染色
各種帽子漂白
洋服プレス
並ニ修理
和服洗張
一般洗濯

小峰クリーニング店
日本橋區小傳馬町三ノ五
電話浪花四一一八番

暑中御見舞申上候

小林先生擔任

日蓮聖人開目鈔講座は

來る八月五日より九月九日迄休講仕候

昭和十一年八月一日

日蓮主義 統一會館

電話牛込五三三六番

本多日生上人著書特價提供

聖語錄 改版 特價 送料共 金壹圓八拾錢

法華經要義 賜天覽 仝 金貳圓五拾錢

日蓮主義心髓 仝 金壹圓五拾錢

日蓮主義精要 仝 金貳圓九拾錢

眞理の基礎に樹つ佛教の信仰 仝 金拾五錢

法華經要品 仝 金五拾錢

日生上人レコード 仝 金參圓廿五錢

日蓮聖人 仝 金拾錢

本尊意識に就て 仝 金貳拾錢

礒部滿事護輯 特價 送料共 金壹圓七拾錢

本多日生上人 仝 金拾錢

勤行作法

河合陟明著

皇道と日蓮主義 金壹圓

月刊「教」誌 定價 送料共 定價一冊 送料 金拾錢 一ヶ年前金 送料共 金五厘 金壹圓貳拾錢

申込所 東京市小石川區音羽町六丁目 「教」發行所 振替口座東京一〇九四〇番

東京市小石川區音羽町六ノ一七

財團法人 統一團出版部

振替東京九四二〇番

統一定價 一冊 金貳拾錢 送料壹錢

一ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共

一ヶ年 金貳圓貳拾錢

注意

▲御申込ハ總テ前金ノ事

▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候

▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十一年十月廿七日 印刷納本

昭和十一年八月一日 發行

（第四百九十七號）

東京市小石川區音羽町六ノ一七 編輯兼發行人 礒部滿事

東京市品川區南品川二ノ一八一 印刷人 大辻松太郎

印刷所 都印刷所 電話高輪六〇二四番

不許複製

東京市小石川區音羽町六丁目一七 發行所 財團法人統一團

電話牛込五三三六番

且且東京九四二〇番

目次

法華經の經旨（中篇）……故本多日生
日蓮宗概觀（其五）……故梶木顯正
人生と法華經（其七）……池ノ内三雄
佛教文學に現れたる人間性（上篇）……本田義英
法華經講話（第三十三講）……小林一郎
記事
○本部團報地方教信　○山陽山陰線を巡りて
○寄附金維持及團費誌料領收

第四十一年九月號